

# すみだ川

永井荷風

青空文庫



俳諧師 はいかいし 松風庵蘿月 しょうふうあんらげつ は今戸 いまど で常磐津 ときはず の師匠 しゅうやう をしてゐる実 じつ  
いもうと の妹 いもうと をば今年 ことし は盂蘭盆 うらぼん にもたづねずにしまつたので毎日 まいにち その事 こと の  
 み気 みげ にしてゐる。然 しか し日盛 ひぎさ りの暑 あつ さにはさすがに家 うち を出 で かねて夕 ゆ  
ふかた 方 かた になるのを待 まち つ。夕 ゆふかた 方 かた になると竹垣 たけがき に朝顔 あさがお のからんだ勝 かち  
 手口 てぐち で行 ぎやうずる 水 みづ をつかつた後 のち 其 その のまゝ真裸 まっぱだか 体 てい で晚 ばんしやく 酌 しやく を傾 か け  
 やつとの事膳 ぜん を離 はな れると、夏 なつ の黄昏 たそがれ も家 いえ 々 々 で焚 た く蚊遣 かやり の烟 けむり と  
 共に ともに いつか夜 よ となり、盆裁 ぼんさい を並 なら べた窓 まど の外 そと の往來 わうらい には簾 すだれ 越 こ  
 しに下駄 げた の音 ね 職 しよくにん 人 ひと の鼻唄 はなうた 人 ひと の話 はなしごゑ 声 こゑ がにぎやかに聞 きこ え出 で

す。蘿月らげつは女房のお滝たきに注意ちやういされてすぐにも今戸いまどへ行くつもりで  
格子戸かうしどを出るのであるが、其辺そのへんの涼すずみだい台だいから声をかけられる  
がまゝ腰おろを下すと、一杯いっばい機嫌いきげんの話はなし好ずきに、每晚まいばんきまつて埒らちも  
なく話し込んでしまふのであつた。

朝夕あさゆふがいくらか涼すずしく楽らくになつたかと思ふと共に大變日ひが短  
くなつて来た。朝顔あさがほの花が日毎ひごとに小さくなり、西日にしびが燃える焰ほのほ  
のやうに狭せまい家いへ中ぢゆうへ差さしこ込んで来る時分じぶんになると鳴なきしきる蟬せみ  
の聲こゑが一際ひとときは耳みみ立つて急せはしく聞きこえる。八月ななかばもいつか半過なかばぎてしま  
つたのである。家の後いへうしろの玉蜀黍とうもろこしの畠はたけに吹ふき渡る風かぜの響ひびきが夜よなぞ  
は折々をり／＼雨あやかと誤あやまれた。蘿月らげつは若い時分じぶんしたい放ほう題だい身みを持もち  
崩ぶした道楽だうらくの名残なごりとして時候じこうの變目かはりめといへば今いまだに骨ほねの節ふし

々、が痛むので、いつも人より先に秋の立つのを知るのである。

秋になつたと思ふと唯ただわけもなく気がせはしくなる。

蘿月らげつは俄にはかに狼狽うろたへ出し、八日やうか頃の夕月ゆふづきがまだ真白ましろく夕焼ゆふやけ

の空にかゝつてゐる頃から小梅こうめ瓦町かはらまちの住居すまひを後にテクあとく今い

戸まどをさして歩いて行つた。

堀割ほりわりづたひに曳舟ひきふね通どほりから直ぐさま左へまがると、土地の

ものでなければ行先ゆくさきの分わからないほど迂回うくわいした小径こみちが三囲みめぐり稲いな

荷りの横手よこてを巡めぐつて土手どてへと通じてゐる。小径こみちに沿うては田圃たんぼを

埋立うめたてた空地あきちに、新しい貸長屋かしながやがまだ空家あきやのまゝに立並たちならんだ

処ところもある。広々ひろ／＼した構かまへの外には大きな庭石にはいしを据並すゑならべた

植木屋うゑきやもあれば、いかにも田舎あならしい茅葺かやぶきの人家じんかのまばらに立

ちつゞいてゐる処ところもある。それ等の家うちの竹垣たけがきの間からは夕月ゆふづきに行ぎやうずゐる水みづをつかつてゐる女の姿すがたの見える事こともあつた。蘿月らげつ

宗匠そうじやうはいくら年としをとつても昔むかしの氣質かたぎは変かはらないので見て見ぬやうに窃そつと立止たちどまるが、大概たいがいはぞつとしない女房にようばうばかりなので、落胆らくたんしたやうに其そのまゝ歩調あゆみを早める。そして売地うりちや貸家かしやの札ふだを見て過すぎる度々たびく、何なんともつかず其その胸算用むなざんようをしながら自分も懐手ふところで大儲おほまうけがして見たいと思しふ。然しかしまた田圃たんぼづたひに歩いて行く中水田うちみづたのところ／＼に蓮はすの花の見事に咲き乱れたさまを眺め青々ながとした稲いねの葉はに夕風ゆふかぜのそよぐ響ひびをきけば、さすがは宗匠そうじやうだけに、銭勘定ぜにかんぢやうの事よりも記憶おぼひに散在かへしてゐる古こ人の句くをば実じつに巧うまいものだと思おも返かへすのであつた。

どて 土手へ上つた時には葉桜のかげは早や小暗く水を隔てた人家  
 には灯が見えた。吹きはらふ河風に桜の病葉がはらく散る。  
 蘿月は休まず歩きつゞけた暑さにほつと息をつき、ひろげた胸を  
 ば扇子であふいだだが、まだ店をしまはずにゐる休茶屋を見付け  
 て慌忙で立寄り、「おかみさん、冷で一杯。」と腰を下した。正  
 やうめん 面に待乳山を見渡す隅田川には夕風を孕んだ帆かけ船  
 が頻りに動いて行く。水の面の黄昏れるにつれて鷗の羽の色が際  
 立つて白く見える。宗匠は此の景色を見ると時候はちがふけ  
 れど酒なくて何の己れが桜かなと急に一杯傾けたくなつたのであ  
 る。

やすみぢや、にようぼ 休茶屋の女房が縁の厚い底の上つたコツプについて出す冷

酒を、蘿月はぐいと飲干して其のまゝ竹屋の渡船に乗った。

丁度河の中程へ来た頃から舟のゆれるにつれて冷酒がおひ

くきにきいて来る。葉桜の上に輝きそめた夕月の光がいかに

も涼しい。滑な満潮の水は「お前どこ行く」と流行唄にもある

やうにいかにも投遣つた風に心持よく流れてゐる。宗匠

は目をつぶつて独で鼻唄をうたつた。

向河岸へつくと急に思出して近所の菓子屋を探して土産を

買ひ今戸橋を渡つて真直な道をば自分ばかりは足許のたし

かなつもりで、実は大分ふらくしながら歩いて行つた。

そこ此処に二三軒今戸焼を売る店にわづかな特徴を見るばかり、

何処の場末にもよくあるやうな低い人家つゞきの横町で



ある。人家じんかの軒のきした下ろぢぐちや路地口ろぢぐちには話しながら涼すゞんでゐる人の浴衣ゆかたが薄うすぐら暗くい軒燈けんとうの光ひかりに際立きはだつて白く見えながら、あたりは一体にひつそりして何処どこかで犬の吠ほえる声と赤児あかごのなく声こゝろが聞きこえる。あまがははすみわた天あまの川がの澄渡すみわたつた空そらに繁こたつた木立だちを聳そびかしてゐる今戸いまど八幡はちまんの前まへまで来ると、蘿月らげつは間もなく並んだ軒燈けんとうの間に常磐津文字豊とぎはづもじとよと勘亭流かんていりうで書いた妹いもうとの家の灯ひかりを認ためた。家の前の往來わうらいには人が二三人も立止たちどまつて内なかなる稽古けいこの淨瑠璃じやうるりを聞いてゐた。

折々をり／＼恐おそしい音ねして鼠ねずみの走はる天てん井じやうからホヤの曇曇つた六分ろくぶん心のランプがところ／＼は宝丹たんだんの広告こうこくや都みやこ新聞しんぶんの新年附録ふろくの美人画びじんがなどで破やぶれ目めをかくした襖ふすまを始め、飴色あめいろに古びた箆筒たんす、

あまもり  
 雨漏のあとのある古びた壁なぞ、八畳の座敷一体をいかにも薄  
 すぐら てら  
 暗く照してゐる。古ぼけた葺戸を立てた縁側の外には小庭が  
 あるのやら無いのやら分らぬほどな闇の中に軒の風鈴が淋しく  
 鳴り虫が静に鳴いてゐる。師匠のお豊は縁日もの、植木鉢を  
 なら ふどうそん かけもの  
 並べ、不動尊の掛物をかけた床の間を後にしてべつたり坐つ  
 た膝の上に三味線をかゝへ、檜の撥で時々前髪のアたりをか  
 ひぎ しやみせん  
 きながら、掛声をかけては弾くと、稽古本を広げた桐の小  
 机を中にして此方には三十前後の商人らしい男が中音で、  
 ちゆうおん  
 「そりや何を云はしやんす、今さら兄よ妹と云ふに云はれぬ恋  
 こひな  
 中は……。」と「小稲半兵衛」の道行を語る。  
 こいなはんべゑ  
 みちゆき  
 蘿月は稽古のすむまで縁近くに坐つて、扇子をぱちくりさせ  
 らげつ けいこ  
 えんぢか  
 せんす

ながら、まだ冷酒ひやざけのすつかり醒めさきらぬ処ところから、時々は我われ知らず口の中で稽古けいこの男と一しよに唄うたつたが、時々は目をつぶつて遠ゑん慮んりよなく噁おくびをした後のち、身体からだを軽く左右さいうにゆすりながらお豊とよの顔をば何なんの気きもなく眺ながめた。お豊とよはもう四十以上であらう。薄うす暗くらい釣つるしランプの光が瘦やせこけた小作りこづくの身体からだをば猶なほ更さらに老ふけて見せるので、ふいと此これが昔むかしは立派りつぱな質屋かあいの可愛かあいらしい箱はこ入いり娘むすめだつたのかと思ふと、蘿月らげつは悲しいとか淋さびしいとか然さう云いふ現実じつじの感かん慨がいを通過とほりこして、唯ただ不思議ふしぎな気がしてならない。其その頃ころは自分みづかも矢張やはり若くて美しくて、女にすかれて、道楽みちがくして、とう／＼実家じつかを七しち生しやうまで勘当かんだうされてしまつたが、今になつては其その頃ころの事はどうしても事実ではなくて夢としか思はれない。算そ

ろばん 盤で乃公の頭をなぐつた親爺にしろ、泣いて意見をした白しろねず  
 鼠の番頭にしろ、暖簾を分けて貰つたお豊の亭主にしろ、さ  
 う云ふ人達は怒つたり笑つたり泣いたり喜んだりして、汗をたら  
 して飽きずによく働いてゐたものだが、一人々々皆死んでしまつ  
 た今日となつて見れば、あの人達はこの世の中に生れて来ても来  
 なくてもつまる処は同じやうなものだつた。まだしも自分とお豊  
 の生きてゐる間は、あの人達は兩人の記憶の中に残されてゐるも  
 の、やがて自分達も死んでしまへばいよく何も彼も煙になつ  
 て跡方もなく消え失せてしまふのだ……。  
 「兄さん、実は二三日中に私の方からお邪魔に上らうと思つてゐ  
 たんだよ。」とお豊が突然話した。

稽古けいこの男は小稲半兵衛こいなはんべゑをさらつた後のち同じやうなお妻八郎兵衛つまはちろべゑの語かたりだ出しを二三度繰返くりかへして帰つて行つたのである。蘿月らげつは尤ももつとらしく坐り直すわなほして扇子せんすで軽く膝ひざを叩たたいた。

「実はね。」とお豊とよは同じ言葉を繰返くりかへして、「駒込こまごめのお寺とつがしくかいせい市区改正とりはらで取払やなかひになるんだとき。それでね、死んだお父とつつアそめるんのお墓やなかを谷中そめるか染井どこか何処どこかへ移まへさなくつちやならないんだつてね、四五日前まへにお寺つかひからお使つかひが来たから、どうしたものかと、そ其その相談そに行かうと思つてたのさ。」

「成程なるほど。」と蘿月らげつは領付うなづいて、「さういふ事うつつなら打捨うちやつても置けまい。もう何年になるかな、親爺おやぢが死んでから……。」

首かしを傾かしげて考へたが、お豊とよの方は着々ちやくく話しを進はなめて染井そめるの

墓地の地代ちだいが一坪つぼいくら、寺への心こころづ付けが何うのかうのと、それについては女の身よりも男の蘿月らげつに万事を引受けて取計とりはからつて貰もらひたいと云いふのであつた。

蘿月らげつはもと小石川表町こいしかはおもてまちの相模屋さがみやと云いふ質屋の後取息子あととりむすこであつたが勘当かんだうの末若隠居すまわかゐんきよの身となつた。頑固ぐわんこな父が世を去

つてからは妹お豊とよを妻にした店の番頭が正直さかみやに相模屋さがみやの商売をつゞけてゐた。処ところが御維新ごゐしん此この方時勢かたじせいの変遷へんせんで次第かうんに家運かうんの傾い

て来た折をりも折火事をりにあつて質屋はそれなり潰つぶれてしまつた。で、

風流ふうりう三昧さんまいの蘿月らげつは已むを得ず俳諧はいかいで世を渡るやうになり、

お豊とよは其その後亭ごてい主しゆに死別しにわかれた不幸むかしばなつゞきに昔名むかしばなを取つた遊いうげ

芸いを幸とよひ常磐津ときはづの師匠ししやうで生計くらしを立てるやうになつた。お豊とよには

今年十八になる男の子が一人ある。零落した女親がこの世の楽しみと云ふのは全く此の一人息子長吉の出世を見やうと云ふ事ばかりで、商人はいつ失敗するか分らないと云ふ経験から、お豊は三度の飯を二度にしても、行くくはわが児を大学校に入れて立派な月給取りにせねばならぬと思つて居る。

蘿月宗匠は冷えた茶を飲干しながら、「長吉はどうしました。」

するとお豊はもう得意らしく、「学校は今夏休みですがね、遊ばしといちやいけなれないと思つて本郷まで夜学にやります。」

「ぢや帰りは晚いね。」

「えゝ。いつでも十時過ぎますよ。電車はありますがね、随分

とほみち  
遠路ですからね。」

「我輩とは違つて今時の若いものは感心だね。」宗匠は

言葉を切つて、「中学校だつけね、乃公は子供を持った事がねえから当節の学校の事はちつとも分らない。大学校まで行くにやまだ余程かゝるのかい。」

「来年卒業してから試験を受けるんでさアね。大学校へ行く前に、もう一ツ……大きな学校があるんです。」お豊は何も彼も一口に説明してやりたいと心ばかりは急つても、矢張り時勢に疎い女の事で忽ち云淀んでしまつた。

「たいした経費だらうね。」

「えゝ其ア、大抵ぢや有りませんよ。何しろ、あなた、月謝



ばかりが毎月まいげつ一円、本代だつて試験の度々たんびに二三円ぢやきゝま  
せんしね、其れそに夏なつ冬ふゆともに洋服を着るんでせう、靴だつて年  
に二足は穿はいてしまひますよ。」

お豊とよは調子てうしづいて苦心こくしんの程ほどを一倍強く見せやうためか声に力を  
入れて話したが、蘿月らげつはその時、其れ程ほどにまで無理をするなら、  
何もなに大学校へ入れないでも、長ちやうきち吉きちにはもつと身分相応さうおうな立  
身みしんの途みちがありさうなものだといふ気がした。しかし口へ出して  
云いふほどの事でもないので、何か話題なにかの変化をやと望む矢先やへ、自  
然じぜんに思ひ出されたのは長ちやうきち吉きちが子供の時分じぶんの遊び友達いとでお糸いとと  
云いつた煎餅屋せんべいやの娘の事である。蘿月らげつは其その頃ころお豊とよの家を訪ねた  
時にはきまつて甥をひの長ちやうきち吉きちとお糸いとをつれては奥山おくやまや佐竹さたけツ原づら

の見世物みせものを見に行つたのだ。

「長吉ちやうきちが十八ぢや、あの娘こはもう立派りつぱな姉ねえさんだらう。矢張やはり

稽古けいこに来るかい。」

「家うちへは来ませんがね、この先さきの杵屋きねやさんにや毎日かよ通つてますよ。

もう直ぢき葭町よしちやうへ出るんだつて云いひますがね……。」とお豊とよ

は何か考なへるらしく語ことばを切つた。

「葭町よしちやうへ出るのか。そいつア豪儀かうぎだ。子供の時からちよいと

口のきゝやうのませた、好いい娘こだつたよ。今夜こんやにでも遊びあそびに来り

やアいゝに。ねえ、お豊とよ。」と宗匠そうしやうは急に元氣げんきづいたが、お

豊とよはポンと長煙管ながぎせるをはたいて、

「以前いぜんとちがつて、長吉ちやうきちも今いまが勉強べんきやうざかりだしね……。」

「はゝゝゝは。間違ひでもあつちやならないと云ふのかね。尤もだよ。この道ばかりは全く油断がならないからな。」

「ほんとき。お前さん。」お豊は首を長く延して、「私の僻目か  
も知れないが、実はどうも長吉の様子に心配でならないのさ  
。」

「だから、云はない事ツちやない。」と蘿月は軽く握り拳で膝  
頭をたゝいた。お豊は長吉とお糸のことが唯何となしに心  
配でならない。と云ふのは、お糸が長唄の稽古帰りに毎朝用  
もないのに屹度立寄つて見る、其れをば長吉は必ず待つてゐ  
る様子で其の時間頃には一足だつて窓の傍を去らない。其れの  
みならず、いつぞやお糸が病気で十日程も寝てゐた時には、長

吉きちは外目よそめも可笑をかしい程ほどにぼんやりして居ゐた事などを息もつかずに語りつゞけた。

次の間まの時計が九時を打出うちだした時突とつぜん然かうしど格子戸かこうしどががらりと明あいた。其その明け様やうでお豊とよはすぐに長ちやうきち吉きちの帰かへつて来た事を知り急に話を途切とぎらし其その方に振返ふりかへりながら、

「大變早こんやいやうだね、今夜は。」

「先生が病気で一時間早くひけたんだ。」

「小梅こつめの伯父おぢさんがおいでだよ。」

返事きこは聞えなかつたが、次の間まに包つゝみを投出なげだす音がして、直様すぐさま長ちやうきち吉きちは温順おとなしさうな弱よわしさうな色の白しろい顔を襖ふすまの間から見せた。

残暑ざんしよの夕日ゆふひが一しきり夏の盛さかりよりも烈はげしく、ひろ／＼した  
 河面かはづら一帯に燃え立ち、殊ことさら更に大学の艇庫ていこの真白まつしろなペンキ塗ぬりの  
 板目はめに反映してゐたが、忽たちまちち燈あかりの光の消えて行くやうにあたりは  
 全体うすぐらに薄うす暗くく灰色へんしよくに変へん色しよくして来て、満くち来る夕汐ゆふしほの上を  
 滑すべつて行く荷船にぶねの帆ほのみが真白まつしろく際立きはだつた。と見る間まもなく初しよし  
 秋うの黄昏たそがれは幕おりの下るやうに早く夜かに変かはつた。流ながれる水みづがいや  
 に眩まぶしくきらく／＼光り出して、渡船わたしぶねに乗のりつて居ゐる人の形かたちをく  
 つきりと墨絵すみゑのやうに黒く染そめ出した。堤つゝみの上に長よこたく横よこたはる葉はざく  
 桜らの木立こたちは此方こなたの岸きしから望おそめば恐おそしいほど真暗まつくらになり、一時いちじ

は面白<sup>おもしろ</sup>いやうに引きつゞいて動いてゐた荷船<sup>にぶね</sup>はいつの間<sup>ま</sup>にか一艘<sup>さう</sup>残らず上流<sup>はう</sup>の方に消えてしまつて、釣<sup>つり</sup>の帰<sup>かへ</sup>りらしい小舟<sup>こぶね</sup>がところ／＼<sup>こ</sup>木の葉<sup>は</sup>のやうに浮いてゐるばかり、見渡<sup>みわた</sup>す隅田川<sup>すみだがは</sup>は再びひろ／＼としたばかりか静<sup>しづかさび</sup>に淋<sup>しみ</sup>しくなつた。遥<sup>はる</sup>か川<sup>かは</sup>上<sup>かみ</sup>の空<sup>そら</sup>のはづれに夏<sup>なつり</sup>の名残<sup>なごり</sup>を示す雲<sup>みね</sup>の峰<sup>みね</sup>が立つてゐて細<sup>い</sup>い稲妻<sup>いなづま</sup>が絶間<sup>たえま</sup>なく閃<sup>ひら</sup>めいては消える。

長<sup>ちやうきち</sup>吉<sup>きち</sup>は先刻<sup>さつき</sup>から一人<sup>ひとり</sup>ぼんやりして、或<sup>あるとき</sup>時は今戸橋<sup>いまどぼし</sup>の欄<sup>ら</sup>干<sup>かん</sup>に凭<sup>もた</sup>れたり、或<sup>あるとき</sup>時は岸<sup>あし</sup>の石<sup>いしがき</sup>垣<sup>かき</sup>から渡場<sup>わたしば</sup>の栈橋<sup>さんぼし</sup>へ下<sup>くだ</sup>りて見<sup>み</sup>たりして、夕日<sup>ゆふひ</sup>から黄<sup>たそがれ</sup>昏<sup>たそがれ</sup>、黄<sup>たそがれ</sup>昏<sup>たそがれ</sup>から夜<sup>よ</sup>になる河<sup>かは</sup>の景<sup>けしき</sup>色<sup>しき</sup>を眺<sup>なが</sup>めて居<sup>ゐ</sup>た。今夜<sup>こんや</sup>暗<sup>くら</sup>くなつて人<sup>ひと</sup>の顔<sup>かほ</sup>がよくは見<sup>み</sup>えない時<sup>じぶん</sup>分<sup>ぶん</sup>になつたら今戸橋<sup>いまどぼし</sup>の上<sup>うへ</sup>でお糸<sup>いと</sup>と逢<sup>あ</sup>ふ約束<sup>やくそく</sup>をしたからである。然<sup>しか</sup>し丁<sup>ちやう</sup>

度日曜日どに當つてあた夜学校やがくかうを口実こうじつにも出来できない処ところから夕飯ゆふめし  
 を済すますが否いなやまだ日の落ちぬ中うちふいと家うちを出てしまつた。一しき  
 り渡場わたしばへ急ぐ人の往来ゆきも今では殆ど絶え、橋の下よどまに夜泊りする  
 荷船にぶねの燈火ともしびが慶養寺けいやうじの高い木立こだちを倒さかさに映さした山谷堀さんやぼりの水に  
 美しく流れた。門口かどぐちに柳やなぎのある新あらたしい二階家にがいからは三味線しやみせんが  
 聞きこえて、水みづに添そふ低い小家こいへの格子戸外かうしどそとには裸体はだかの亭主ていしゆが涼すずみに  
 出いはじめた。長吉ちやうきちはもう来る時分じぶんであらうと思つて一心いつしんに  
 橋向むかうを眺ながめた。

最初に橋を渡つて来た人影あざは黒い麻あさの僧衣ころもを着た坊主ぼうずであつた。  
 つゞいて尻端折しりはしをりの股引もゝひきにゴム靴かうもりがきをはいた請負師うけおひしらしい男おとこの  
 通とほつた後あと、暫しばらくしてから、蝙蝠傘かうもりがさと小包こづゝみを提さげた貧げし気げな女おんな

房ひよりが日和下駄げだで色気もなく砂すなを蹴けた立て、大股おほまたに歩いて行つた。

もういくら待つても人ひと通りはない。長吉ちやうきちは詮せん方かたなく疲れ

た眼まなこを河かはの方ほうに移した。河面かはづらは先刻さつぎよりも一体いったいに明あかるくなり気味きみ

悪い雲くもの峯みねは影もなく消えてゐる。長吉ちやうきちは其その時ちやうめい長命寺じやうめいじ

辺へんの堤つゝみの上うへの木立こだちから、他分たぶん旧曆きうれき七月しちがつの満月まんげつであらう、赤味あかみ

を帯びた大きな月の昇りかけて居ゐるのを認めた。空は鏡のやうに

明あかるいのでそれを遮さへぎつゝみ木立こだちはますゝ黒く、星は宵よひの明みやう星じやう

の唯ただ一つ見えるばかりで其その他たことは尽つく余あまりに明あかるい空の光あかりに掻かき

消され、横よこざまに長く棚たな曳ひく雲くものちぎれが銀色ぎんいろに透すき通とほつて輝あかりい

てゐる。見るゝ中うち満月まんげつが木立こだちを離はなれるに従したがひ河岸かはぎしの夜露よつゆをあ

びた瓦屋根かはらやねや、水みづに湿ぬれた棒杭ぼうくわ、満潮まんてうに流れ寄よる石垣下いしがきした



の藻草もぐさのちぎれ、船の横腹よこはら、竹竿たけざなぞが、逸いちはや早く月の光を  
 受けて蒼あをく輝あき出した。忽たちまち長ちやうき吉きちは自分の影かげが橋板はしいたの上に  
 段々に濃こく描ゑがき出されるのを知つた。通とほりかゝるホーカイ節ぶしの男  
 女にが二人、「まア御覽ごらんよ。お月様。」と云いつて暫しばらく立たち止どまつた後のち、  
 山谷堀さんやほりの岸きし辺べに曲まがるが否いなや当付あてつけがましく、

書生しやうせいさん橋はしの欄らん干かんに腰打うちかけて――

と立ちつゞく小家こいへの前まへで歌うたつたが金かねにならなと見たか歌うたひも了をは  
 らず、元もとの急いそぎ足あしで吉原土手よしはらどての方ほうへ行いつてしまつた。

長ちやうき吉きちはいつも忍しのび会あひの恋人こひびとが経験けいけんするさま／＼の懸念けねん  
 と待ちあぐむ心のいらだちの外ほかに、何なんとも知れぬ一種いっしゆの悲哀ひあひを感かん  
 じた。お糸いとと自分じぶんとの行末ゆくすゑ………行末ゆくすゑと云いふよりも今夜こんや会あひつ

て後の明日のち あしたはどうなるのであらう。お糸いとは今夜兼こんやかねてから話はなのして  
 あるよしちやう葭町よしちやうの芸者屋げいしやまで出掛でかけて相談さうだんをして来ると云いふ事ことで、  
 其その道だうちゆう中ちゆうをば二人一にんいち緒じゆに話はなしながら歩あかうと約束やくそくしたのであ  
 る。お糸いとがいよゝゝ芸者げいしやになつてしまへば此これまでのやうに毎日  
 逢あふ事ことがであきなくなるのみならず、それが萬事ばんじの終はりであるらし  
 く思おもはれてならない。自分の知しらない如何いかにも遠とほい国くにへと再またび帰  
 る事ことなく去いつてしまふやうな氣きがしてならないのだ。今夜こんやのお月つき  
 様さまは忘わすれられない。一生いっしやうに二度見みられない月つきだなアと長ちやう吉きちは  
 しみじみ思おもつた。あらゆる記憶きおくの数かず々くが電光でんくわうのやうに閃ひらめく。最さい  
 初ぢか地方かたまち町の小学しょうがく校こうへ行く頃ころは毎日まいにちのやうに喧嘩けんくわして遊あそんだ。  
 やがては皆みんななから近所きんじよの板いた塀べいや土蔵どざうの壁かべに相々あひひ傘がさをかゝれて囃はや

された。小梅こうめの伯父おぢさんにつれられて奥山おくやまの見世物みせものを見に行つたり池いけの鯉こひに麩ふをやつたりした。

三社祭さんじやまつりの折をりお糸いとは或年あるとし踊屋台をどりやたいへ出て道成寺だうじやうじを踊つた。町内まちうち一同いっとうで毎年まいとし汐干狩しほひがりに行く船ふねの上うへでもお糸いとはよく踊つた。

学校の帰り道かへりみちには毎日まいにちのやうに待乳山まつちやまの境内けいだいで待合まちあはせて、人の知らない山谷さんやの裏町うらまちから吉原田圃よしはらたんぼを歩いた………。あゝ、

お糸いとは何故なぜ芸者げいしやなんぞになるんだらう。芸者げいしやなんぞになつちやいけないと引止ひきとめたい。長吉ちやうきちは無理むりにも引止ひきとめねばならぬと決心こころざししたが、すぐ其その傍そばから、自分おれはお糸いとに対してたいしては到底たうていそれだけの威力ゐりよくのない事を思返おもひかへした。果敢はかない絶望あきらと諦めあきらめを感じた。お糸いとは二ツ年下ふたねの十六じゅうろくであるが、此頃このころになつては長吉ちやうきちは殊こと

とさら  
 更に日一日とお糸が遙か年上の姉であるやうな心持がして  
 ならぬのであつた。いや最初からお糸は長吉よりも強かつた。  
 長吉よりも遙に臆病ではなかつた。お糸長吉と相々  
 傘にかゝれて皆なから囃された時でもお糸はびくともしなかつた。  
 平氣な顔で長ちやんはあたいの旦那だよと怒鳴つた。去年初めて  
 学校からの帰り道を待乳山で待ち合はさうと申し出したのもお  
 糸であつた。宮戸座の立見へ行かうと云つたのもお糸が先であつ  
 た。帰りの晩くなる事をもお糸の方が却て心配しなかつた。知ら  
 ない道に迷つても、お糸は行ける処まで行つて御覽よ。巡查さ  
 んにきけば分るよと云つて、却て面白さうにづん／＼歩いた：  
 ……

あたりを構はず橋板の上に吾妻下駄を鳴す響がして、小走りに突然お糸がかけ寄つた。

「おそかつたでせう。気に入らないんだもの、母さんの結つた髪なんぞ。」と馳け出したために殊更ほつれた鬢を直しながら、

「をかしいでせう。」

長吉はたゞ眼を円くしてお糸の顔を見るばかりである。い

つもと変りのない元気のいゝはしやぎ切つた様子がこの場合寧ろ憎らしく思はれた。遠い下町に行つて芸者になつてしまふのが少しも悲しくないのかと長吉は云ひたい事も胸一ぱいになつて口には出ない。お糸は河水を照す玉のやうな月の光にも一向気のつかない様子で、

「早く行かうよ。私わたいお金持ちだよ。今夜こんやは。仲店なかみせでお土産みやげを買かつて行くんだから。」とすたく／＼歩きだす。

「明日あした、きつと帰るか。」長吉ちやうきちは吃どもるやうにして云いひ切つた。

「明日あした帰らなければ、明後日あさつての朝はきつと帰つて来てよ。不断着ふだんぎ

だの、いろんなもの持つて行かなくなつちやならないから。」

待乳山まつちやまの麓ふもとを聖天しやうでん町ちやうの方はうへ出やうと細い路地ろぢをぬけた。

「何故なぜ黙つてるのよ。どうしたの。」

「明後日あさつて帰つて来てそれから又彼方またあつちへ去いつてしまふんだらう。え。

お糸いとちゃんいとはもう其それなり向むかうの人になつちまふんだらう。もう

僕ぼくとは会あへないんだらう。」

「ちよい／＼遊びに帰つて来るわ。だけれど、私わたいも一生懸命いっしやうけんめいにお

稽古けいこしなくつちやならないんだもの。」

少しすこは声こゑを曇くもらしたもの、其その調子てうしは長吉ちやうきちの満足まんじつするほどの  
 悲愁ひしふを帯おびてはゐなかつた。長吉ちやうきちは暫しばくしてから又突またとつ然ぜんに、

「なぜ芸者げいしやなんぞになるんだ。」

「又またそんな事こときくの。をかしいよ。長ちやうさんは。」

お糸いとは已すでに長吉ちやうきちのよく知しつてゐる事情じやうけいをば再びまたくどくし

く繰くりかへ返かへした。お糸いとが芸者げいしやになると云いふ事は二三年にさんねんいやもつと前

から長吉ちやうきちにも能よく分わかつてゐた事ことである。其その起因おこりは大工だいであ

つたお糸いとの父親ちちのふちがまだ生なきて居ゐた頃ころから母親おふくろは手内職てないしよくにと針

仕事しごとをしてゐたが、その得意とくい先さきの一軒けんで橋場はしばの妾せふたく宅たくにゐる御

新造しんぞうがお糸いとの姿すがたを見て是非ぜひ娘むすめぶん分ぶんにして行ゆく末すゑは立派りつぱな芸者げいしやに

したてたいと云出した事からである。御新造の実家は葭町で  
 幅のきく芸者家であつた。然し其の頃のお糸の家はさほどに困  
 つても居なかつたし、第一に可愛い盛の子供を手放すのが辛かつ  
 たので、親の手元でせいぜい芸を仕込ます事になつた。其後父親  
 が死んだ折には差当り頼りのない母親は橋場の御新造の世話で  
 今の煎餅屋を出したやうな関係もあり、萬事が金銭上の義理ば  
 かりでなくて相方の好意から自然とお糸は葭町へ行くやう  
 に誰れが強ひるともなく決つて居たのである。百も承知してゐる  
 こんな事情を長吉はお糸の口からきくために質問したのでな  
 い。お糸がどうせ行かねばならぬものなら、もう少し悲しく自分  
 のために別を惜しむやうな調子を見せて貰ひたいと思つたからだ。



長吉ちやうきちは自分とお糸いとの間あひだにはいつの間にか互たがひに疎通そつうしない感情

の相違あひだの生じて居る事を明あきらかに知つて、更さらに深い悲かなしみを感じた。

この悲かなしみはお糸いとが土産物みやげものを買たふ為ために仁王門にわうもんを過なぎて仲店なかみせへ出た時更さらに又堪またたへがたいものとなつた。夕涼ゆふすゞみに出掛でかける賑にぎや

かな人出ひとでの中にお糸いとはふいと立止たちどまつて、並ならんで歩く長吉ちやうきちの

袖そでを引き、「長ちやうさん、あたいも直ぢきあんな扮装なりするんだねえ。紹ろ

縮緬ちりめんだねきつと、あの羽織はおり……。」

長吉ちやうきちは云いはれるまゝに見返みかへると、島田しまだに結ゆつた芸者芸者と、其そ

れに連立つれだつて行くのは黒紹くろろの紋付もんつきをきた立派りつぱな紳士しんしであつた。

あゝお糸いとが芸者芸者になつたら一緒に手を引いて歩く人は矢張やつぱりあゝ云い

ふ立派りつぱな紳士しんしであらう。自分は何年たつたらあんな紳士しんしになれる

のか知ら。兵児帯一ツの現在の書生姿が云ふに云はれず情なく思はれると同時に、長吉は其の将来どころか現在に於ても、已に単純なお糸の友達たる資格さへないものゝやうな心持がした。

いよく御神燈のつゞいた葭町の路地口へ来た時、長吉はもう此れ以上果敢いとか悲しいとか思ふ元気さへなくなつて、唯だぼんやり、狭く暗い路地裏のいやに奥深く行先知れず曲込んであるのを不思議さうに覗込むばかりであつた。

「あの、一イ二ウ三イ……四つ目の瓦斯燈の出てるところだよ。松葉屋と書いてあるだらう。ね。あの家よ。」とお糸は屢橋場の御新造につれて来られたり、又はその用事で使ひに来たりして能

く知つてゐる軒先の燈を指し示した。

「ぢやア僕は帰るよ。もう……。」と云ふばかりで長吉は  
 矢張り立止つてゐる。その袖をお糸は軽く捕へて忽ち媚るやう  
 に寄添ひ、

「明日か明後日、家へ帰つて来た時きつと逢はうね。いゝかい。  
 きつとよ。約束してよ。あたいの家へお出よ。よくツて。」

「あゝ。」

返事をきくと、お糸は其れですつかり安心したものゝ如くすた  
 く路地の溝板を吾妻下駄に踏みならし振返りもせずに行つ  
 てしまつた。其の足音が長吉の耳には急いで馳けて行くやう  
 に聞えた、かと思ふ間もなく、ちりんくと格子戸の鈴の音がし

た。長吉は覚え<sup>ちやうきち</sup>ず後<sup>あと</sup>を追<sup>お</sup>つて路<sup>ろ</sup>地<sup>ぢ</sup>内<sup>うち</sup>へ這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>らうとしたが、同  
 時に一番<sup>ちん</sup>近くの格子<sup>かうしど</sup>戸<sup>ど</sup>が人<sup>ひと</sup>声<sup>こゑ</sup>と共に開<sup>あ</sup>いて、細<sup>ゆみ</sup>長<sup>はり</sup>い弓<sup>ぢやう</sup>張<sup>やう</sup>提<sup>てい</sup>  
 灯<sup>ちん</sup>を持<sup>も</sup>つた男<sup>おとこ</sup>が<sup>あ</sup>出<sup>で</sup>て来<sup>き</sup>たので、何<sup>なん</sup>と云<sup>い</sup>ふ事<sup>こと</sup>なく長<sup>ちやう</sup>吉<sup>きち</sup>は気<sup>き</sup>後<sup>おく</sup>れの  
 したばかりか、顔<sup>かほ</sup>を見<sup>み</sup>られるのが厭<sup>いや</sup>さに、一<sup>いつ</sup>散<sup>さん</sup>に通<sup>とほ</sup>りの方<sup>ほう</sup>へと  
 遠<sup>とほ</sup>かつた。円<sup>まる</sup>い月<sup>つき</sup>は形<sup>かたち</sup>が大<sup>だい</sup>分<sup>ぶん</sup>小<sup>せう</sup>くなつて光<sup>あを</sup>が蒼<sup>す</sup>く澄<sup>す</sup>んで、静<sup>しづ</sup>かに聳<sup>そび</sup>  
 える裏<sup>うら</sup>通<sup>とほ</sup>りの倉<sup>くら</sup>の屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>の上<sup>うへ</sup>、星<sup>ほし</sup>の多<sup>おほ</sup>い空<sup>そら</sup>の真<sup>ま</sup>中<sup>なか</sup>に高<sup>たか</sup>く昇<sup>のぼ</sup>つて  
 居<sup>ゐ</sup>た。

## 三

月<sup>つき</sup>の出<sup>で</sup>が夜<sup>よ</sup>毎<sup>ごと</sup>おそくなるにつ<sup>つ</sup>れて其<sup>そ</sup>の光<sup>ひかり</sup>は段<sup>だん</sup>々<sup>ぜん</sup>冴<sup>さ</sup>えて来<sup>き</sup>た。河<sup>か</sup>

はかせ 風の湿ツぽさが次第に強く感じられて来て浴衣の肌がいやに薄  
 すさむ 寒くなつた。月はやがて人の起きて居る頃にはもう昇らなくな  
 つた。空には朝も昼過ぎも夕方も、いつでも雲が多くなつた。雲  
 かさな は重り合つて絶えず動いてゐるので、時としては僅かに其の間  
 く 々に殊更らしく色の濃い青空の残りを見せて置きながら、空  
 一面に蔽ひ冠さる。すると気候は恐しく蒸暑くなつて来て、自  
 然と浸み出る脂汗が不愉快に人の肌をねばくさせるが、  
 しかまた 然し又、さう云ふ時にはきまつて、其の強弱と其の方向の定まら  
 ない風が突然に吹き起つて、雨もまた降つては止み、止んでは  
 また降りつゞく事がある。この風やこの雨には一種特別の底深  
 い力が含まれて居て、寺の樹木や、河岸の葦の葉や、場末に

つゞく貧しい家の板屋根いたやねに、春や夏には決して聞かれぬ音おんきや  
 響うを伝へる。日が恐おそろしく早く暮れてしまふだけ、長い夜よはすぐ  
 に寂しんく々と更ふけ渡つて来て、夏ならば夕涼ゆふすゞみの下駄げたの音さへぎに遮さられ  
 てよくは聞きこえない八時か九時の時ときの鐘かねがあたりをまるで十二時の  
 ごとしづかか如く静しずかにしてしまふ。蟋蟀こほろぎの声こゑはいそがしい。燈火ともしびの色いろはい  
 やに澄すむ。秋。あゝ秋だ。長ちやうきち吉きちは初めて秋といふものは成なるほ  
 程ほどいやなものだ。実じつに淋さびしくつて堪たまらないものだと身みにしみ／  
 ” \ 感じた。

学校がっこうはもう昨日きのふから始はじまつてゐる。朝早く母親ははの用意よういして呉くれる  
 弁当箱べんとうばこを書物しよぶつと一所いこに包うちんで家うちを出でて見たが、二日目三日目には  
 つく／” \ 遠かんい神田かんだまで歩いて行くゆ気力がなくなつた。今までは

毎年まいねん長い夏休みの終をはる頃ころと云いへば学校の教けうぢやう場なんが何なんとなく恋しく授業の開始する日ひが心こゝろ待まちに待たれるやうであつた。其そのうひくしい心こゝろもち持もちはもう全まつたく消えてしまつた。つまらない。学問なんぞしたつてつまるものか。学校は己おのれの望むやうな幸福を与とへる処ところではない。………幸福とは無関係のものである事を長ちやうやうきちち吉きちは物もの新あたらしく感じた。

四日目の朝いつものやうに七時前に家うちを出て観くわん音おんの境けい内だいまで歩いて来たが、長ちやう吉きちはまるで疲れきつた旅たび人びとが路みち傍ばたの石いしに腰こしをかけるやうに、本堂の横手よこてのベンチの上に腰こしを下おろした。いつの間まに掃除さうぢをしたものか朝露あさつゆに湿しめつた小砂利こじやりの上うへには、投な捨げてた汚きたい紙片かみきれもなく、朝早い境内けいだいはいつもの雑沓ざつたふに引か

へて妙めうに広く神かう々／＼しく寂しんとしてゐる。本堂らうかの廊下らうかには此処こゝで  
 夜明よあかしたらしい迂散うさんな男おとこが今いまだに幾いくにん人も腰こしをかけて居ゐて、其そ  
 の中には垢あかじみだ単衣ひとへの二三尺さんじやく帯おびを解といて平氣ふんどしで禪ぜんをしめ直ちし  
 てゐる奴やつもあつた。此頃このごろの空癖そらくせで空そらは低ひくく鼠ねずみ色いろに曇くもり、  
 あたりの樹木じゆもくからは虫囀むしばんだ青あおいまゝの木葉このはが絶たえ間まなく落ち  
 る。鳥からや鶏たの啼なきこゑはとはおとさはやはの羽音はが爽さわかに力強きこく聞きえる。溢あふれる水みづに  
 濡ぬれた御手洗みたらしの石いしが翻ひるがが奉納ほうなふの手拭てぬぐひのかけにもう何なんとなく  
 つめたつめた冷ひやいやうに思おもはれた。其それにも拘かゝらず朝参あさまりの男女おとこは本堂ほんだうの階かゝ  
 段のぼを上のぼる前まへに何いづれも手てを洗あらふ為ためにと立止たちどまる。其その人々ひとの中に  
 長ちやう吉うきちは偶ぐう然ぜんにも若わかい一人ひとりの芸者げいしやが、口くちには桃色ももいろのハンケチ  
 をくは啣くはへて、一重ひとへ羽織はおりの袖口そでぐちを濡ぬらすまい為ためか、真白まっしろな手先てさきをば



腕までも見せるやうに長くさし伸<sup>のば</sup>してゐるのを認めた。同時にすぐ隣<sup>となり</sup>のベンチに腰をかけてゐる書生が二人、「見ろく、ジンゲルだ。わるくないなア。」と云<sup>い</sup>つてゐるのさへ耳にした。

島田<sup>しまだ</sup>に結<sup>ゆ</sup>つて弱々しく両<sup>りやうかた</sup>肩<sup>な</sup>の撫<sup>さが</sup>で下<sup>さ</sup>つた小作<sup>こづく</sup>りの姿<sup>すがた</sup>と、口<sup>く</sup>

尻<sup>ちり</sup>のしまつた円<sup>まる</sup>顔<sup>がほ</sup>、十六七の同じやうな年<sup>とし</sup>頃<sup>ごろ</sup>とが、長<sup>ちやうき</sup>

吉<sup>ち</sup>をして其<sup>そ</sup>の瞬<sup>しゆん</sup>間<sup>かん</sup>危<sup>あやふ</sup>くベンチから飛び立たせやうとした程<sup>ほど</sup>

お糸<sup>いと</sup>のことを連想せしめた。お糸<sup>いと</sup>は月のいゝあの晩に約束した通

り、其<sup>そ</sup>の翌<sup>よく</sup>々<sup>く</sup>日に、其<sup>そ</sup>れからは長く葭<sup>よし</sup>町<sup>ちやう</sup>の人たるべく手荷物<sup>てにもつ</sup>

を取りに歸つて来たが、其<sup>そ</sup>の時<sup>ちやう</sup>長<sup>きち</sup>吉<sup>ち</sup>はまるで別の人のやうに

お糸<sup>いと</sup>の姿<sup>すがた</sup>の変<sup>かは</sup>つてしまつたのに驚いた。赤いメレンスの帯ばかり

締<sup>し</sup>めて居<sup>ゐ</sup>た娘<sup>むすめ</sup>姿<sup>すがた</sup>が、突<sup>とつ</sup>然<sup>ぜん</sup>たつた一日<sup>あひだ</sup>の間に、丁<sup>ちやう</sup>度<sup>うど</sup>今<sup>み</sup>御手<sup>た</sup>

洗らいで手を洗すつてゐる若い芸者まその儘まの姿すがたになつてしまつたのだ。

薬くすり指ゆびにはもう指環ゆびわさへ穿はめてゐた。用もないのに幾度いくたびとな

く帯あひだの間から鏡かゞみ入れや紙かみいれ入いを抜き出して、白粉おしろいをつけ直し

たり鬢びんのほつれを撫なで上げたりする。戸外そとには車を待たして置い

ていかにも急いそがしい大切な用件を身に帯びてゐると云つた風ふうで一時

間もたつかたゝない中うちに歸つてしまつた。其その歸りがけ長ちやうきち吉

に残した最後の言葉は其その母親おししやうの「御師匠おししやうさんのをばさん」に

もよろしく云いつてくれと云いふ事であつた。まだ何時いつ出るのか分わから

ないから又また近うちい中に遊あそびに来るわと云いふ懐なつかしい声こゑも聞きれないので

はなかつたが、其それはもう今までのあどけない約束ではなくて、

世馴よなれた人の如じよさい才さいない挨拶あいさつとしか長ちやうきち吉きちには聞取きれなかつ

た。娘であつたお糸、幼馴染の恋人のお糸はこの世にはもう生きてゐないのだ。路傍に寝て居る犬を驚して勢よく駈け去つた車の後に、えも云はれず立迷つた化粧の匂ひが、いかに苦しく、いかに切なく身中にしみ渡つたであらう……。

本堂の中にと消えた若い芸者の姿は再び階段の下に現れて仁王門の方へと、素足の指先に突掛けた吾妻下駄を内輪に軽く踏みながら歩いて行く。長吉は其の後姿を見送ると又更に恨めしいあの車を見送つた時の一刹那を思起すので、もう何としても我慢が出来ぬといふやうにベンチから立上つた。そして知らずく其の後を追ふて仲店の尽るあたりまで来たが、若い芸者の姿は何処の横町へ曲つてしまつたものか、もう見

えない。両側りやうがはの店では店先を掃除さうじして品物を並べたてゝゐる

最中さいちゆうである。長吉ちやうきちは夢中むちゆうで雷門かみなりもんの方へどん／＼歩

いた。若い芸者の行衛ゆくゑを見究めみきはやうと云ふのではない。自分の眼

にばかりあり／＼見えるお糸いとの後姿うしろすがたを追つて行くのである。

学校の事も何も彼も忘れて、駒形こまがたから蔵前くらまへ、蔵前くらまへから浅

草橋さばし……其れそから葎町よしちやうの方へとどん／＼歩いた。然し電

車の通とほつてゐる馬喰町ばくろちやうの大通りおほどほまで来て、長吉ちやうきちは何の横

町こちやうを曲まがればよかつたのか少すこしく当惑たうわくした。けれども大体の

方角はよく分わかつてゐる。東京に生れたものだけに道をきくのが厭

である。恋人の住む町と思へば、其の名そを徒いたづらに路傍ろぼうの他人もたらに漏す

のが、心の秘密を探られるやうで、唯たゞわけもなく恐おそしくてならな

い。長吉は仕方なしに唯だ左へ左へと、いゝかげんに折れて行くゆくと蔵造りの問屋らしい商家のつゞいた同じやうな堀割ほりわりの岸に二度も出た。其の結果長吉は遥か向うに明治座の屋根やねを見てやがて稍広い往来へ出た時、其の遠い道のはづれに河かはじ蒸気船の汽笛の音の聞えるのに、初めて自分の位置と町の方角とを覺つた。同時に非常な疲労を感じた。制帽を冠つた額ひたひのみならず汗は袴をはいた帯のまはりまでしみ出してゐた。然しもしかう一瞬間しゆんかんとても休む気にはならない。長吉は月の夜に連よれられて来た路地口をば、これは又一層の苦心、一層の懸念けねん、一層の疲労を以つて、やつとの事で見出し得たのである。

片側かたかはに朝日がさし込んで居るので路地の内は突つき当りまで見み

とほ透された。格子戸づくりの小さい家ばかりでない。昼間見ると意外  
 に屋根のやね高い倉もある。忍返ししのびがへをつけた板塀いたべいもある。其の  
 上から松の枝まつも見える。石灰いしばひの散つた便所の掃除口さうぢぐちも見える。  
 塵芥箱ごみばこの並んだ処もある。其の辺へんに猫がうろくして居る。人  
 通りほは案外はずに烈しい。極めて狭い溝板せま どぶいたの上を通行の人は互に  
 身を斜めなに捻向ねぢむけて行き交ふ。稽古けいこの三味線しゃみせんに人の話はなし声こゑが  
 交つて聞える。洗物あらひものする水音みづおとも聞える。赤い腰巻こしまきに裾すそを  
 まくつた小女こをんなが草箒くさぼうきで溝板どぶいたの上を掃はいてゐる。格子戸かうしどの  
 格子かうしを一本々々一生懸命みかに磨あいて居るものもある。長吉ちやうきちは人目ひとめ  
 の多いきおくのに気後きおくれたのみでなく、さて路地内ろぢうちに進入すすみいつたにし  
 た処ところで、自分おれはどうするのかと初めて反省はんせいの地位ちゐに返つた。人知ひとし

れず松葉屋まつばやの前を通つて、そつとお糸いとの姿すがたを垣間かいまみ見たいとは思つたが、あたりが余りに明あかるす過ぎる。さらば此このまゝ路地口ろぢぐちに立つてゐて、お糸いとが何かの用で外へ出るまでの機会を待たうか。然ししかこれこもまた、長ちやうきち吉きちには近所の店みせ先さきの人目ひとめが尽く自分ばかりを見張みはつて居ゐるやうに思はれて、とても五分と長く立つてゐる事はできない。長ちやうきち吉きちは兎とに角思案かくしあんをしなほすつもりで、折をりから近所の子供を得意にする粟餅屋あはもちやの爺ぢやうがカラカラカラと杵きねをならして来る向むかうの横町よこちやうの方へと遠とほざかつた。

長ちやうきち吉きちは浜町はまちやうの横町よこちやうをば次第に道の行くまゝゆに大おほか川端はばたの方へと歩いて行つた。いか程ほど機会を待つても昼中ひるなかはどうしても不便である事を僅わづかに悟り得たのであるが、すると、今

度はもう学校へは遅おそくなつた。休むにしても今日けふの半はん日にち、これ  
 から午後ごの三時さんじまでをどうして何ど処こに消費しょうひしやうかと云いふ問題もんじの  
 解決かいげつに迫せめられた。母親ぼふのお豊とよは学校がっこうの時間じかん割わりまでをよしりぬく知し抜ぬい  
 てゐるので、長ちやうきち 吉きちの帰かへりが一時間いちじかん早はやくても、晚おそくても、すぐ  
 に心配しんぱいして煩うるさく質しつ問もんする。無む論ろん 長ちやうきち 吉きちは何なんとでも容たやす易やすく云い紛まぎ  
 らすことは出で来きると思おもふものゝ、其それだけだけの嘘うそをつく良心りんしんの苦痛くつう  
 に逢あふのが厭いやでならない。丁ちやうど度ど来きかゝる川かは端たんには、水すゐ練れん場ば  
 の板いた小こ屋やが取とり払ははられて、柳やなぎの木こ蔭かげに人ひとが釣つりをしてゐる。其それを  
 ば通とほりがゝりの人ひとが四よ人も五ご人もぼんやり立たつて見みてゐるので、  
 長ちやうきち 吉きちはいゝ都合ごうごだと同どうじやうに釣つりを眺ながめる振ふりで其そのそそばに立た  
 寄ちよつたが、もう立たつてゐるだけの力ちからさへなく、柳やなぎの根ね元もとの支さ木ぎ



に背せをよせかけながら蹲しゃがんでしまつた。

さつきから空の大たい半はんは真ま青つさをに晴れて来て、絶えず風の吹き

通かよふにも拘かゝらず、ぢり／＼人の肌はだに焼やき附つくやうな湿しつ気けのある秋の

日は、目の前なる大おほ川かはの水一面に眩まぶしく照り輝くので、往わう来らい

の片側に長くつゞいた土堀どべいからこんもりと枝を伸のばした繁りの蔭かげが

いかにも涼すずしさうに思はれた。甘酒屋あまざけやの爺ぢやうがいつか此この木蔭こかげに

赤く塗ぬつた荷にを下おろしてゐた。川かは向むかうは日の光の強い為ために立たち続つゞ

く人家じんかの瓦屋根かはらやねをはじめ一帯の眺望てうぼうがいかにも汚きたらしく見え、

風に追おひやられた雲の列さかんが盛ばいに煤煙ばいえんを吐はく製造場せいぞうばの烟筒けむだしよ

りも遥はるかに低く、動かうかずに層をなして浮うかんでゐる。釣道具つりを売うしる後

の小家こいへから十一時の時計が鳴つた。長ちやう吉きちは数へながら其それを

聞いて、初めて自分はいかに長い時間を歩き暮くらしたかに驚おどろいたが、  
 同時に此この分ぶんで行けば三時までの時間を空費くうひするのもさして難かたく  
 はないと稍や安心あんしんすることも出来できた。長ちやうきち吉つりしは釣師つりしの一人ひとりが握にぎり  
めし飯めしを食くひはじめたのを見て、同じやうに弁当箱べんたうばこを開いた。開  
 いたけれども何なんだか気きまりが悪わるくて、誰たれか見てゐやしないかとき  
 よろ／＼四辺あたりを見みました。幸ひるぢかひ午ひるぢか近くみわたのことで見渡みわたす川岸かわぎしに人  
 の往來わうらいは杜絶とだえてゐる。長ちやうきち吉つりしは出来できるだけ早く飯めしでも菜さいで  
 も皆みんなな鵜呑うのみにしてしまつた。釣師つりしはいづれも木像もくざうのやうに黙もくつ  
 てゐるし、甘酒屋あまざけやの爺ぢやうは居眠ゐねむりしてゐる。午過ひるすぎの川端かはたはま  
 すく静しづかになつて犬いぬさへ歩いて来こない処ところから、流石さすがの長ちやうきち吉つりしも  
 自分おのれは何故なぜこんななに気きまりを悪わるがるのであらう臆おくびやう病びやうなのであ

らうと我ながら可笑しい気にもなつた。

両国橋と新大橋との間を一した後、長吉はい

よく浅草の方へ帰らうと決心するにつけ、「もしや」といふ一

念にひかされて再び葭町の路地口に立寄つて見た。すると午

前ほどには人通りがないのに先ず安心して、おそろく松葉屋

の前を通つて見たが、家の中は外から見ると非常に暗く、人の声

三味線の音さへ聞えなかつた。けれども長吉には誰にも咎

められずに恋人の住む家の前を通つたと云ふそれだけの事が、殆

んど破天荒の冒険を敢てしたやうな満足を感じさせたので、こ

れまで歩きぬいた身の疲労と苦痛とを長吉は遂に後悔し

なかつた。

## 四

その週間の残りの日数ひかずだけはどうかやらかうやら、  
 校へ通かよつたが、日曜日一日を過すごすと其その翌あくるあさ朝は電車に乗つて  
 上野まで来ながらふいと下おりてしまった。教師に差出さしだすべき代数  
 の宿題を一つもやつて置かなかつた。英語と漢文の下した読よみをもし  
 て置かなかつた。それのみならず今日けふは又また、凡およそ世の中で何なにより  
 も嫌きらひな何なによりも恐おそしい機械体操のある事を思ひ出したからであ  
 る。長吉ちやうきちには鉄棒から逆さかにぶらさがつたり、人の丈たけより高い  
 棚たなの上から飛とび下おりるやうな事は、いかに軍曹ぐんさう上あがりの教師から強し

ひられても全級ぜんきふの生徒から一斉せいに笑はれても到底たうてい出来得べき  
 ことではない。何なにによらず体育の遊戯いうぎにかけては、長吉ちやうきちはど  
 うしても他の生徒一同に伴つて行く事が出来ないので、自然と軽  
 侮いぶの声の中に孤立こりつする。其の結果は、遂つひに一同から意地悪いぢわるくいぢ  
 められる事になり易やすい。学校は単にこれだけでも随分ずぶん厭いやな処、  
 苦しいところ、辛い処つらところであつた。されば長吉ちやうきちはその母親がい  
 かほど望んだ処ところで今になつては高等学校へ這入はいらうと云ふ氣は全  
 くない。若もし入学すれば校則として当初はじめの一年間は是非ぜひとも狂きやう  
 暴ぼう無残むざんな寄宿舎生活きしゆくしやをしなければならぬ事を聴知きゝしつてゐた  
 からである。高等学校寄宿舎内きしゆくしやに起おこるいろ／＼な逸話いつわは早くか  
 ら長吉ちやうきちの胆きもを冷ひやしてゐるのであつた。いつも画学ぐわがくと習字に

かけては全級誰も及ぶものゝない長吉の性情は、鉄拳だとか柔術だとか日本魂だとか云ふものよりも全くちがひ異つた他の方面に傾いてゐた。子供の時から朝夕に母が渡世の三味線を聴くのが大好きで、習はずして自然に絃の調子を覚え、町を通る流行唄などは一度聴けば直ぐに記憶する位であつた。小梅の伯父なる蘿月宗匠は早くも名人になるべき素質がある  
と見抜いて、長吉をば檜物町でも植木店でも何処でもいゝから一流の家元へ弟子入をさせたらばとお豊に勧めたがお豊は断じて承諾しなかつた。のみならず以来は長吉に三味線を弄る事をば口喧しく禁止した。

長吉は蘿月の伯父さんの云つたやうに、あの時分から三

味線せんを稽古けいこしたなら、今頃いまごろは兎とに角かく一人前いちにんまへの芸人げいじんになつて  
 るたに違ちがひない。さすればよしやお糸いとが芸者げいしやになつたにした処ところで、  
 こんなに悲惨みじめな目に遇あはずとも済すんだであらう。あゝ実じつに取返とりかへ  
 しのつかない事ことをした。一生いっせいの方針ほうしんを誤あやまつたと感じた。母親ぼろけつが急  
 に憎にくくなる。例たとへられぬほど怨うらめしく思おもはれるに反さかして、蘿月らげつの伯  
 父ぢさんの事ことが何なんとなく取継とりすがつて見みたいやうに懐なつかしく思おもひかへ返かへさ  
 れた。これまでは何なんの気きもなく母親ぼろけつからも亦また伯父おぢ自身みづかみの口くちからも  
 度々たびたび聞きかされてゐた伯父おぢが放蕩ほうたう三昧さんまいの経歴けいれきが恋こひの苦痛くるうを知  
 り初そめた長ちやう吉きちの心こころには凡すべて新あらたしい何なんかの意味いみを以もつて解釈かいさくされ  
 はじめた。長ちやう吉きちは第一だいいちに「小梅こうめの伯母おばさん」と云いふのは元金もとぎ  
 瓶びん大黒だいこくの華魁おいらんで明治めいしの初め吉原よしはら解放こうめの時とき小梅こうめの伯父おぢさん

を頼つて来たのだとやら云ふ話を思出した。伯母さんは子供の  
 頃自分をば非常に可愛がつて呉れた。其れにも係らず、自分の母  
 親のお豊はあまり好くは思つてゐない様子で、盆暮の挨拶も  
 ほんの義理一遍らしい事を構はず素振に現してゐた事さへあつた。  
 長吉は此処で再び母親の事を不愉快に且つ憎らしく思つた。  
 殆ど夜の目も離さぬ程自分の行ひを目成つて居るらしい母親の慈  
 愛が窮屈で堪らないだけ、もしこれが小梅の伯母さん見たや  
 うな人であつたら——小梅のをばさんはお糸と自分の二人を見  
 て何とも云へない情のある声で、いつまでも仲よくお遊びよと云  
 つて呉れた事がある——自分の苦痛の何物たるかを能く察し  
 て同情して呉れるであらう。自分の心がすこしも要求してゐない



幸福を頭から無理に強ひはせまい。長吉は偶然にも母親のやうな正しい身の上の女と小梅のをばさんのやうな或種の経歴ある女との心理を比較した。学校の教師のやうな人と蘿月伯父さんのやうな人とを比較した。

午頃まで長吉は東照宮の裏手の森の中で、捨石の上よこたに横はりながら、こんな事を考へつゞけた後は、包の中にかくした小説本を取出して読み耽つた。そして明日出すべき欠席届にはいかにして又母の認印を盗むべきかを考へた。

## 五

ひと

一しきり毎日毎夜のやうに降りつゞいた雨の後、今度は雲一ツ

見えないやうな晴天が幾日と限りもなくつゞいた。然しどうか

して空が曇ると忽ちに風が出て乾ききつた道の砂を吹散す。こ

の風と共に寒さは日にまし強くなつて閉切つた家の戸や障子が

絶間なくがたりくと悲しげに動き出した。長吉は毎朝七時

に始る学校へ行くため晩くも六時には起きねばならぬが、すると

毎朝の六時が起るたびに、だんく暗くなつて、遂には夜と同じ

く家の中には燈火の光を見ねばならぬやうになつた。毎年冬

のはじめに、長吉はこの鈍い黄い夜明のランプの火を見ると、

何とも云へぬ悲しい厭な気がするのである。母親はわが子を励ま

すつもりで寒さうな寝衣姿のまゝながら、いつも長吉より

は早く起きてあたゝかあさめし暖い朝飯をばちやんと用意して置く。長吉は  
そ其の親切をすまないと感じながら何分なにぶんにも眠くてならぬ。もう  
しばらこたつ暫く炬燵にあたつてゐたいと思ふのを、無暗むやみと時計ばかり気にす  
 る母にせきたてられて不平ふへいだらく、河風かはかぜの寒い往來わうらいへ出る  
 のである。或時あるときはあまりに世話を焼かれ過るのに腹を立て、  
 注意される襟えりまき巻をわざと解ときすて、風邪かぜを引いてやつた事もあ  
 った。もう返らない幾年いくねんか前蘿月まへらげつの伯父おぢにつれられお糸いとも一  
よとりいち所に酉とりの市いちへ行つた事があつた………毎年まいとしその日の事を思ひ  
ころ出す頃から間まもなく、今年ことしも去年と同じやうな寒い十二月がやつ  
 て来るのである。

長吉ちやうきちは同じやうな其その冬ことしの今年ことしと去年、去年とその前年ぜんねん、

それから其れと幾年も溯つて何心なく考へて見ると、人は  
 成長するに従つていかに幸福を失つて行くものを明かに経験し  
 た。まだ学校へも行かぬ子供の時には朝寒ければゆつくりと寝た  
 いだけ寝て居られたばかりでなく、身体の方もまた其程に寒さ  
 を感ずることが烈しくなかつた。寒い風や雨の日には却つて面  
 白く飛び歩いたものである。あゝ其れが今の身になつては、朝  
 早く今戸の橋の白い霜を踏むのがいかに辛くまた昼過ぎにはい  
 つも木枯の騒ぐ待乳山の老樹に、早くも傾く夕日の色がい  
 かにも悲しく見えてならない。これから先の一年くは自分の身  
 にいかなる新しい苦痛を授けるのであらう。長吉は今年の十  
 二月ほど日数の早くたつのを悲しく思つた事はない。観音の

境内けいだいにはもう年としの市いちが立つた。母親のもとへとお歳暮せいぼのしるしにお弟子でしが持つて来る砂糖袋さとうぶくろや鯉かつぶし節ふしなどがそろ／＼床とこの間まへ並び出した。学校の学期試験は昨日きのふすんで、一方ひとかたならぬ其その不成績てもとに対する教師の注意書ちゆういがきが郵便で母親の手許てもとに送り届けられた。

初めから覚悟かくごしてゐた事なので長吉ちやうきちは黙つて首をたれて、何かにつけてすぐに「親一人子一人」と哀あはれツぽい事を云出いひだす母親の意見を聞いてゐた。午前ひるまへ稽古けいこに来る小娘こむすめ達が帰つて後午のちひるす過ぎには三時過ぎてからでなくては、学校帰りの娘達むすめはやつて来ぬ。今が丁度ちやうど母親が一番手すきの時間である。風がなくて冬の日が往來わうらいの窓一面にさしてゐる。折をりから突とつぜん然ぜんまだ格子戸かうしどをあ

けぬ先さきから、「御免ごめんなさい。」と云いふ華美はでな女の声こゑ、母親おどろが驚おどろいて立つ間まもなく上あがりがまちがまち 框しやうじの障子しやうじの外うから、「をばさん、わたしよ。御無沙汰ごぶさたしちまつて、お詫わびに來たんだわ。」

長ちやうきち 吉ちやうきちは顫ふるへた。お糸いとである。お糸いとは立派りっぱなセルの吾妻あづまコオトの紐ひもを解ときく上あがつて來た。

「あら、長ちゃんも居ゐたの。学校ががお休み………あら、さう。」  
 其それから付つけたやうに、ほゝ、ほと笑わらつて、さて丁寧ていねいに手てをついて御辞儀おじぎをしながら、「をばさん、お変かはりもありませんの。ほんとに、つい家うちが出でにくいものですから、あれツきり御無沙汰ごぶさたしちまつて………」

お糸いとは縮緬ちりめんの風呂敷ふろしきにつゝんだ菓子折くわしをりを出でした。長吉あは呆あ

つげ  
 氣に取られたさまで物も云はずにお糸の姿を目成つてゐる。母親  
 も一寸烟ちよつとけむに巻かれた形で進物しんもつの礼を述べた後のち、「きれいにお  
 なりだね。すつかり見違へちまつたよ。」と云つた。

「いやにふけちまつたでせう。皆さう云つてよ。」とお糸は美し  
 く微笑ほくそんで紫縮緬むらさきぢりめんの羽織はおりの紐ひもの解けかゝつたのを結び直す  
 ついでに帯の間あひだから緋天鵲絨ひびろうどの煙草入たばこいれを出して、「をばさん。  
 わたし、もう煙草喫むやうになつたのよ。生意氣なまいきでせう。」

今度は高く笑つた。

「此方こつちへおよんなさい。寒いから。」と母親のお豊とよは長火鉢ながひばちの  
 鉄瓶てつびんを下おろして茶を入れながら、「いつお弘ひろめしたんだえ。」

「まだよ。ずつと押詰おしづまつてからですつて。」

「さう。お糸いとちゃんなら、きつと売れるわね。何なにしろ綺麗きれいだし、ちやんともう地ぢは出来できてゐるんだし……。」

「おかげさまでねえ。」とお糸いとは言葉を切つて、「あつちの姉あねさんも大変たいへんに喜んでたわ。私わたしなんかよりもつと大きな癖くせに、それそれ随ずい分ぶん出来できない娘こがあるんですもの。」

「この節せつの事ことだから……。」お豊とよはふと気がついたやうに茶ちやだ棚なから菓子鉢くわしぼちを出だして、「あいにく何なんにも無なくつて……道だう了れうさまのお名物めいぶつだつて、鳥渡ちよつとおつなものだよ。」と箸はしでわざと摘つまんでやつた。

「お師匠ツしよさん、こんちは。」と甲高かんだか一本調子いっぽんてうしで、二人づれの小娘こむすめが騒さう々／＼しく稽古けいこにやつて来た。



「をばさん、どうぞお構ひなく……。」

「なにいゝんですよ。」と云つたけれどお豊はやがて次の間へ立つた。

長吉は妙に氣まりが悪くなつて自然に俯向いたが、お糸の方は一尙變つた様子もなく小声で、

「あの手紙届いて。」

隣の座敷では二人の小娘が声を揃へて、嗟峨やお室の花ざかり。長吉は首ばかり領付せてもぢくしてゐる。お糸が手紙を寄越したのは一の酉の前時分であつた。つい家が出にくいと云ふだけの事である。長吉は直様別れた後の生涯をこま／＼と書いて送つたが、然し待ち設けたやうな、折返した

お糸いとの返事は遂つひに聞く事が出来できなかつたのである。

「観くわん音おんさまの市いちだわね。今夜こんや一いつしよ所しよに行かなくつて。あた

いいと  
今夜こんや泊とまつてツてもいゝんだから。」

長ちやう吉きちは隣座敷となりざしきの母親おとを気兼きがねして何なんとも答へる事ができな

い。お糸いとは構かまはず、

「御飯ごはんたべたら迎むかひに来てよ。」と云いつたが其その後あとで、「をばさ

んも一いつしよ所しよにいらツしやるでせうね。」

「あゝ。」と長ちやう吉きちは力の抜けた声になつた。

「あの……。」お糸いとは急いそぎに思出おもひだして、「小梅こうめの伯父おぢさん、ど

うなすつて、お酒おに酔よつて羽子板屋はごいたやのお爺ぢいさんと喧嘩けんくわしたわね。

何時いつだつたか。私わたし怖こくなツちまツたわ。今夜こんやいらツしやればいゝ

のに。」

お糸いとは稽古けいこの隙すきを窺うかがつてお豊とよに挨拶あいさつして、「ぢや、晩ほど。どうもお邪魔じやまいたしました。」と云いひながらすたく帰かつた。

## 六

長吉ちやうきちは風邪かぜをひいた。七草ななくさ過ぎて学校はじまが始とつた処ところから一

日無理にちむりをして通学たうがくした為ために、流行りやうのインフルエンザかにかつて正

月つき一いちぱい寝通ねとほしてしまつた。

八幡はちまんさまの境内けいだいに今日けふは朝あさから初午はつうまの太鼓たいこが聞きえる。暖あたたかい穏おだやかな午後ひるすぎの日光ひかりが一面いっぺんにさし込む表おもての窓まどの障子しやうじには、折をり／＼

\のき軒かすを掠かすめる小鳥の影ひらめが閃ひらめき、茶の間の隅すみの薄うす暗ぐらい仏壇ぶつだんの  
 奥おくまでが明あかるく見え、床とこの間の梅まがもう散ちりりはじめた。春しゅんは閉しめ切きつ  
 た家うちの中うちまでも陽ひ気きにおとづれて来たのである。

長ちやうきち

吉まへは二三日まへ前から起おきてゐたので、此この暖あたい日かをぶら／

\散歩でに出掛でけた。すつかり全ぜん快くわいした今いまになつて見れば、二

十日じふ以上かも苦くしんだ大たい病びやうを長ちやうきち吉まへはもつけの幸まひであつた

と喜よろこんでゐる。とても来月の学年試験しけんには及き第だいする見込みこみがない

と思おもつてゐた処ところなので、病氣びやうき欠席けつせきの後あとと云いへば、落第らくだいしても

母ははに對たいして尤もつとも至極しごくな申まを訊しわげがでできると思おもふからであつた。

歩いて行ゆく中うちいつか浅草公園あさくさこうえんの裏手うらてへ出た。細とほい通とほりの片側かたがはに

は深い溝どぶがあつて、それを越こした鉄柵てつさくの向むかうには、処ところ々／＼の

冬枯れして立つ大木の下に、五区の揚弓店の汚らしい裏手が  
 がつゞいて見える。屋根の低い片側町の人家は丁度後から深  
 い溝の方へと押詰められたやうな気がするので、大方其のため  
 であらう、其れ程に混雑もせぬ往來がいつも妙に忙しく見え、  
 うろく／＼徘徊してゐる人相の悪い車夫が一寸風采の小綺  
 麗な通行人の後に煩く付き纏つて乗車を勧めてゐる。長吉は  
 いつも巡查が立番してゐる左手の石橋から淡島さまの方ま  
 でがずつと見透される四辻まで歩いて来て、通りがりの人々  
 が立止つて眺めるまゝに、自分も何といふ事なく、曲り角に出  
 してある宮戸座の絵看板を仰いだ。

いやに文字の間をくツ付けて模様をやうに太く書いてある名題

の木札きくだを中央まんなかにして、その左右には恐おそろしく顔ちひさの小さい、眼おほきの大きい、指先ゆびさきの太い人物が、夜具やぐをかついだやうな大い着物を着て、さまざまな誇張こちやうてき的の姿勢しせいで活躍くわつやくして居るさまが描ゑがかれてある。この大きい絵看板ゑかんばんを蔽おほふ屋根形やねがたの軒のきには、花車だしにつけるやうな造り花つくばなが美しく飾りつけてあつた。

長吉ちやうきちはいか程暖ほめた、かひよりい日和あひだでも歩いてゐると流石さすがにまだ立春に

なつたばかりの事とて暫しばらくの間寒あひだい風をよける処ところをと思ひ出した矢先やさき、芝居しばゐの絵看板ゑかんばんを見て、其そのまゝ狭せまい立見たちみの戸口へと進み寄つた。内うちへ這入はいると足場あしばの悪い梯子段はしごだんが立つてゐて、其その中なかほど程まがから曲まがるあたりはもう薄暗うすぐらく、臭くさい生なま暖あたい人込ひとごみの温う気が猶なほ更暗さらい上はうの方から吹き下りて来る。頻しきりに役者の名を呼ぶ

掛かけ声こゑが聞きえる。それを聞くと長ちやう吉きちは都会育ちの観劇者くわんげつしやばかりが経験する特とく種しゆの快感と特とく種しゆの熱情とを覚おぼえた。梯子段はしごだんの二三段を一躍ひととびに駈かけあが上あつて人込みの中に割わり込こむと、床板ゆかいたの斜なめなつた低い屋根裏やねうらの大おほ向むかうは大きな船の底へでも下りたやうな心持こゝろもち。後の隅すみ々々／＼についてゐる瓦斯ガスの裸はだか火かの光は一ぱいに詰つまつてゐる見物人の頭に遮さげられて非常に暗く、狭せま苦くるしいので、猿さるのやうに人のつかまつてゐる前まへ側がはの鉄棒から、向むかうに見える劇場の内部は天てん井じやうばかりがいかにも広ひろ々々／＼と見え、舞台は色づき濁にごつた空気くわいの為ために却かへつて小さく甚遠く見えた。舞台はチヨンと打つた拍子木ひやうしぎの音に今丁度ちやうどまはつて止つた処ところである。極きはめて一直線な石垣いしがきを見せた台の下に汚よごれた水色の布ぬのが敷いて

あつて、後うしろを限かぎる書割かきわりには小ちひさく大名屋敷だいみやうやしきの練堀ねりべいを描えがき、  
 其その上うへの空一面そらをば無理むりにも夜よだと思おもはせるやうに隙間すきまもなく真ま  
 つくろ  
 黒くろに塗ぬりたてゝある。長ちやうきち吉きちは観劇くわんげきに對たいする此これまでの経験けいけん  
 で「夜」と「川端かはぼた」と云いふ事ことから、きつと殺ころし場ばに違ちがひないと幼をさな  
 い好奇心こうしんから丈伸せのびをして首くびを伸のばすと、果はたせるかな、絶たえざる低ひ  
 い大太鼓おほだいこの音ねに例たとひの如ごとく板いたをバタバタ叩たたく音ねが聞きえて、左手ひだりの  
 辻つじ番ばん小屋こやの蔭かげから仲ちゆうげん間げんと塵ごじを抱かへた女おんなとが大きな声こゑで争あひ  
 ながら出でて来きる。見物人みぶつじんが笑わらつた。舞台ぶたいの人物じんぶつは落おつたものを搜さが  
 す体ていで何なにかを取り上げると、突とつ然ぜん前まへとは全まく違ちがつた態度たいどになつ  
 て、極きはめて明瞭めいれうに淨瑠璃じやうるり外題げだいい梅柳うめやなぎ中宵月なかよひづき、勤つとめまする  
 役人やくじん……と読よみはじめる。それそれを待まち構かまへて彼方かなた此方こなたから見物みぶつ



人が声をかけた。再び軽い拍子木の音を合図に、黒衣の男が右手の隅すみに立てた書割かきわりの一部を引取ると袴ひきとを着た浄瑠璃かみしも語三人、三味線弾しやみせんひきふたり二人が、窮屈きうくつさうに狭い台の上に並んで居て、直ぐに弾出ひきだす三味線しやみせんからつゞいて太夫たいふが声を合してかたり出した。長ちやうきち吉はこの種の音楽にはいつも興味を以て聞き馴なれてゐるので、場内ぢやうないの何処どこかで泣き出す赤児あかごの声と其れを叱咤しつたする見物人の声さまたに妨げられながら、而も明かに語る文句と三味線しやみせんの手までを聴きき分ける。

朧おぼろよ夜に星の影さへ二ツ三ツ、四ツか五ツか鐘かねの音も、もしや我身わがみの追手かと………

また又しても軽いバタ／＼が聞えて夢中になつて声をかける見物人

のみならず場ちやうちゆう中ちゆう一体が気色立つ。それも道理だ。赤い襦袢じゆばんの上に紫むらさき縹じゆす子の幅えり広い襟えりをつけた座敷着ざしきぎの遊女あそびが、冠かぶる手てぬぐ拭ひに顔をかくして、前まへかゞまりに花道はなみちから駈出かけだしたのである。

「見えねえ、前まへが高いツ。」「帽子をとれツ。」「馬鹿野郎。」

なぞと怒鳴どなるものがある。

落ちて行衛ゆくゑも白魚しらうをの、舟ふねのかゞりに網あみよりも、人目ひとめいと

うて後あと先さきに…………

女おんなに扮ふんした役者やくしやは花道はなみちの尽つきるあたりまで出て後うしろを見返みかへりながら台詞せりふを述べた。其そのあと後うたに唄うたがつづく。

しばしたゞずイうむ上手うまより梅見返うめみかへりの舟ふねの唄うた。忍しのぶなららく

闇やみの夜よは置おかしやんせ、月つきに雲うみのさはりなく、辛しん気き待まちつ宵よひ、

十六夜の、内の首尾はエーよいとのよいとの。聞く辻つじう

占らにいそいそと雲くも足あし早あまき雨あま空そらも、思おもひがけなく吹ふき

晴はれて見みかはす月の顔かほと顔かほ……

見物まなごが又また騒さわぐ。真ま黒くろに塗ぬりたてた空かきの書わり割まの中央まんを大なかき

く穿くりぬ抜ぬいてある円まるい穴あなに灯ひがついて、雲くも形がたの蔽おほひをば糸ひきで引あ上あ

げるのが此方こなたからでも能よく見みえた。余あまりに月つきが大あきく明あいから、

大名だいみ屋やう敷やしきの堀へいの方ほうが遠はうくて月つきの方かへが却かへつて非ひ常じょうに近ちかく見みえる。

然しかし長ちやう吉きちは他たの見物けんぶつも同どう様やう少すくしも美うしい幻げん想さうを破やぶられな

かつた。それのみならず去年こぞの夏なつの末すえ、お糸いとを葭よし町ちやうへ送おくるた

め、待まち合あした今戸いまどの橋はしから眺ながめた彼あの大おほきな円まるいく月つきを思おもひ

起おこすと、もう舞台ぶたいは舞台ぶたいでなくなつた。

着流し散髪の男がいかにも思ひやつれた風で足許危く歩み出る。女と摺れちがひに顔を見合して、

「十六夜か。」

「清心さまか。」

女は男に縋つて、「逢ひたかつたわいなア。」

見物人が「やア御兩人。」「よいしよ。やけます。」なぞと叫ぶ。笑ふ声。「静かにしろい。」と叱りつける熱情家もあつた。

舞台は相愛する男女の入水と共に、つて、女の方が白魚舟の夜網にかゝつて助けられる処になる。再び元の舞台に返つ

て、男も同じく死ぬ事が出来なくて石垣の上に這ひ上る。遠く  
 の騒ぎ唄、富貴の羨望、生存の快樂、境遇の絶望、機会と  
 運命、誘惑、殺人。波瀾の上にも脚色の波瀾を極めて、遂に  
 演劇の一幕が終る。耳元近くから恐しい黄い声が、「変るよ  
 ——ウ」と叫び出した。見物人が出口の方へと崩を打つて下り  
 かける。

長吉は外へ出ると急いで歩いた。あたりはまだ明いけれど  
 もう日は当つて居ない。ごたくした千束町の小売店の暖簾  
 や旗なぞが激しく翻つて居る。通りがりに時間を見るため腰を  
 かゞめて覗いて見ると軒の低い其れ等の家の奥は真暗であつた。  
 長吉は病後の夕風を恐れてますます歩みを早めたが、然

し山谷堀さんやぼりから今戸橋いまどぼしの向むかうに開ける隅田川すみだがはの景色けしきを見ると、

どうしても暫しばらく立止たちどまらずにはゐられなくなつた。河かはの面おもては悲し

く灰色はくしに光あかりつてゐて、冬ふゆの日の終はりを急いそがす水蒸気すゐじようきは対岸つゝみの堤つゝみ

をおぼろに霞かすめてゐる。荷船にぶねの帆ほの間あひだをば鷗かもめが幾羽いくはとなく飛び交ちが

ふ。長ちやうきち吉きちはどん／＼流ながれて行く河かは水みづをば何なにがなしに悲しい

ものだと思おもつた。川かは向むかうの堤つゝみの上うへには一ツ二ツ灯ひがつき出した。

枯かれた樹木じゆもく、乾かわいた石垣いしがき、汚よごれた瓦屋根かはらやね、目めに入るいるものは

こと／＼あ、  
 長く褪あせた寒さむい色いろをして居ゐるので、芝居しばゐを出でてから一瞬しゆんかん間かんと

ても消き失えうせない清せい心しんと十六夜いざよひの華美はでやかな姿すがたの記憶きおくが、羽子板はごいた

の押絵おしゑのやうに又また一段いちだんと際立きはだつて浮うかび出す。長ちやうきち吉きちは劇げき中ちゆう

の人物にんぶつをば憎にくい程ほどに羨うらやんだ。いくら羨うらやんでも到底たうてい及びおよびもつか

いわが身の上を悲しんだ。死んだ方がましだと思ふだけ、一緒に死んでくれる人のない身の上を更に痛切に悲しく思つた。

今戸橋を渡りかけた時、掌でぴしやりと横面を張撲るやうな河風。思はず寒さに胴顫ひすると同時に長吉は咽喉の奥から、今までは記憶してゐるとも心付かずにあつた浄瑠璃の一曲がわれ知らずに流れ出るのに驚いた。

今さら云ふも愚痴なれど……

と清元きよもとの一派が他流の模すべからざる曲調きよくてうの美麗びれいを托たくした一節いつせつである。長吉ちやうきちは無論むろん太夫たいふさんが首かみと身体からだを伸上のびあがらして唄うたつたほど上手じやうずに、且かつ又またそんな大きな声こゑで唄うたつたのではない。咽喉のどから流れるままに口の中で低唱ていしやうしたのであるが、其それに

よつて長<sup>ちやうきち</sup> 吉は己<sup>や</sup>みがたい心の苦痛が幾分<sup>いくぶん</sup>か柔げられるやうな心<sup>こころもち</sup>持<sup>も</sup>がした。今更<sup>いまさら</sup>云ふも愚痴<sup>ぐち</sup>なれど………ほんに思へば………岸より靦<sup>のぞ</sup>く青柳<sup>あをやぎ</sup>の………と思<sup>おもひだ</sup>出す節<sup>ふし</sup>の、ところ／＼を長<sup>ちやうきち</sup> 吉<sup>きち</sup>は家の格子戸<sup>かうしど</sup>を開ける時まで繰返<sup>くりかへ</sup>し繰返<sup>くりかへ</sup>し歩いた。

## 七

あくるひ 翌<sup>あくるひ</sup>日の午後<sup>ひるすぎ</sup>に又<sup>また</sup>もや宮戸座<sup>みやとざ</sup>の立見<sup>たちみ</sup>に出掛<sup>でか</sup>けた。長<sup>ちやうきち</sup> 吉<sup>きち</sup>は恋の二人<sup>にん</sup>が手を取つて嘆<sup>なげ</sup>く美しい舞台<sup>ぶたい</sup>から、昨日<sup>きのふ</sup>始めて経験<sup>けんげん</sup>した云<sup>い</sup>ふべからざる悲哀<sup>ひあい</sup>の美感<sup>びかん</sup>に酔<sup>よ</sup>ひたいと思つたのである。其<sup>そ</sup>ればかりでなく黒ずんだ天<sup>てん</sup>井<sup>じやう</sup>と壁<sup>かべ</sup>襖<sup>ふすま</sup>に囲<sup>かこ</sup>まれた二階<sup>にがい</sup>の室<sup>むろ</sup>がい



やに陰氣臭くて、燈火の多い、人の大勢集つてゐる芝居の賑  
 ひが、我慢の出来ぬほど恋しく思はれてならなかつたのである。  
 長吉は失つたお糸の事以外に折々は唯だ何と云ふ訳もなく  
 淋しい悲しい気がする。自分にも何う云ふ訳だか少しも分らない。  
 唯だ淋しい、唯だ悲しいのである。この寂寞この悲哀を慰める  
 ために、長吉は定め難い何物かを一刻々に激しく要求  
 して止まない。胸の底に潜んだ漠然たる苦痛を、誰と限らず優  
 しい声で答へてくれる美しい女に訴へて見たくてならない。単に  
 お糸一人の姿のみならず、往來で摺れちがつた見知らぬ女の姿  
 が、島田の娘になつたり、銀杏返の芸者になつたり、又は丸  
 鬻の女房姿になつたりして夢の中に浮ぶ事さへあつた。

長吉ちやうきちは二度見る同じ芝居しばゐの舞台をば初めてのやうに興味深く眺めたなが。其れそと同時に、今度は賑かな左右の棧敷さしきに対する觀察をも決して閑却かんきやくしなかつた。世の中にはあんなに大勢女おほぜいがある。あんなに大勢女おほぜいのある中で、どうして自分は一人も自分を慰めてくれる相手に邂逅めぐりあはないのであらう。誰れたでもいゝ。自分に一言ひとことやさしい語ことばをかけてくれる女さへあれば、自分はこんなせつに切なくお糸いとの事ばかり思ひつめては居まいゐ。お糸いとの事を思へば思ふだけ其その苦痛をへらす他のものが欲しいほ。さすれば学校とそれに関連した身の前途ぜんとに対する絶望のみに沈められて居まいゐ。

……

立見たちみの混雑の中に其その時突とつぜん然自分の肩を突くものがあるので

おどろ 驚いて振りむくと、長 吉は鳥打帽を眉深に黒い眼鏡をかけて、  
うしろ 後の一段高い床から首を伸して見下す若い男の顔を見た。

「吉さんぢやないか。」

さう云つたものゝ、長 吉は吉さんの風采の余りに変つて居

るのに暫くは二の句がつけなかつた。吉さんと云ふのは地方町

の小学校時代の友達で、理髪師をしてゐる山谷通りの親爺の店

で、此れまで長 吉の髪をかつてくれた若衆である。それ

が絹ハンケチを首に巻いて一二重の下から大島紬の羽織

を見せ、いやに香水を匂はせながら、

「長さん、僕は役者だよ。」と顔をさし出して長 吉の耳元に

に囁いた。

立ち見の混雑の中でもあるし、長吉は驚いたまゝ黙つてゐる

より仕様がなかつたが、舞台はやがて昨日の通りに河端の暗

闘になつて、劇の主人公が盗んだ金を懐中に花道へ駈出で

ながら石礫を打つ、其れを合図にチヨンと拍子木が響く。

幕が動く。立見の人中から例の「変るよーウ」と叫ぶ声。人

崩れが狭い出口の方へと押合ふ間に幕がすつかり引かれて、シ

ヤギリの太鼓が何処か分らぬ舞台の奥から鳴り出す。吉さんは長

吉の袖を引止めて、

「長さん、帰るのか。いゝぢやないか。もう一幕見ておいでな

」

役者の仕着せを着た賤しい顔の男が、渋紙を張つた小箆をも

つて、次の幕まくの料金を集めに来たので、  
長吉ちやうきちは時間を心配し

ながらも其そのまゝ居残ゐのこつた。

「長さんちやうさん、綺麗きれいだよ、掛けかられるぜ。」吉さんきちさんは人のすいた後うしろの

明り取りあかとりの窓へ腰こしをかけて長吉ちやうきちが並ならんで腰こしかけるのを待つや

うにして再びほく「僕ぼくア役者やくしやだよ。変かはつたらう。」と云いひながら友いうぜ

禅んちりめん縮ちぢ緬めんの襦じゆばん袷そでを引き出して、わざとらしく脱はづした黒い

金縁きんぶちめがね眼鏡くもの曇くもりを拭ふきはじめた。

「変かはつたよ。僕ぼくア始め誰だれかと思おもつた。」

「驚おどろいたかい。はゝゝゝは。」吉さんきちさんは何なんとも云いへぬほど嬉うれしさ

うに笑わらつて、「頼たのむぜ。長さんちやうさん。かう見みえたつて憚はげりながら役者やくしや

だ。伊井一いひ座ざの新あさ俳優さいうだ。明後日あさつてから又また新富町しんとみちやうよ。出揃でそろつた

ら見きたに来給へ。いゝかい。楽屋口がくやぐちへまはつて、玉水たまみづを呼んでく

れつて云いひたまへ。」

「玉水たまみづ……?」

「うむ、玉水たまみづ三郎……。」云いひながら急せしく懐中ふところから

女持をんなもちの紙入かみいれを探さがり出して、小さな名刺を見せ、「ね、玉たまみ

水づさぶらう三郎。昔きの吉さんぢやないぜ。ちやんともう番附ばんづけに出でて

居みるんだぜ。」

「面白おもしろいだらうね。役者になつたら。」

「面白おもしろかつたり、辛つらかつたり……然しかし女をんなにやア不自由しんじゆうしねえ

よ。」吉きちさんは鳥渡長吉ちよつとの顔を見て、「長ちやうさん、君は遊あそぶのか

い。」

長吉ちやうきちは「まだ」と答へるのが其その瞬しゆんかん間かん男おとこの恥はぢであるや

うな気がして黙つた。

「江戸一の梶田楼かぢたろうツて云いふ家うちを知つてるかい。今夜こんや一緒にお出いでな。心配しんぱいしないでもいゝんだよ。のろけるんぢや無いが、心配しんぱいしないでもいゝわけが有あるんだから。お安やすくないだらう。はゝゝゝは。」と吉きちさんは他愛たわいもなく笑つた。長吉ちやうきちは突とつ然ぜんに、

「芸者げいしやは高いんだらうね。」

「長ちやうさん、君きみは芸者げいしやが好きなのか、贅ぜい沢たくだ。」と新俳優しんはいゆうの吉きちさんは意外いがいらしく長吉ちやうきちの顔かほを見返みかへしたが、「知しれたもんさ。然しかし金かねで女めづを買かふなんざア、ちツとお人ひとが好過よすぎらア。僕ぼくア公園こうえんで二に三軒待合けまぢあひを知つてるよ。連れてツてやらう。万事ばんじ方寸ほうすんの中うちにあ

りぎ。」

先刻さつぎから三人四人と絶えず上あがつて来る見物人で大向おほむかうはかな

り雑沓ざつたふして来た。前まへの幕まくから居残ゐのこつてゐる連中れんちゆうには待ちく

たびれて手を鳴ならすものもある。舞台の奥から拍子木ひやうしぎの音おとが長い

間まを置きながら、それでも次第しだいに近く聞きこえて来る。長吉ちやうきちは窮き

屈うくつに腰こしをかけた明り取りの窓から立上たちあがる。すると吉きちさんは、

「まだ、なかくだ。」と独言ひとりごとのやうに云いつて、「長ちやうさん。

あれアまはりの拍子木ひやうしぎと云いつて道具立だうぐだての出来上できあがつたつて事を、

役者の部屋はうの方へ知らせる合図あひづなんだ。開あく迄までにやアまだ、なか

くよ。」

悠然いうぜんとして巻煙草まきたばこを吸すひ初はじめる。長吉ちやうきちは「さうか」と



感服したらしく返事をしながら、然し立上つたまゝに立見の鉄  
 つがうし  
 格子から舞台の方を眺めた。花道から平土間の櫺の間をば吉  
 さんの如く、りの拍子木の何たるかを知らない見物人が、すぐ  
 にも幕があくのかと思つて、出歩いてゐた外から各自の席に戻ら  
 うと右方左方へと混雑してゐる。横手の棧敷裏から斜に引幕  
 の一方にさし込む夕陽の光が、其の進み入る道筋だけ、空中に  
 漂ふ塵と煙草の煙をばあり／＼と眼に見せる。長吉はこの夕  
 陽の光をば何と云ふ事なく悲しく感じながら、折々吹込む外の  
 風が大きな波を打せる引幕の上を眺めた。引幕には市川○  
 ○丈へ、浅草公園芸妓連中として幾人となき書連ねた芸者  
 の名が読まれた。暫くして、

「吉さん、君、あの中で知つてる芸者があるかい。」

「たのむよ。公園は乃公達の縄張中だぜ。」吉さんは一種の屈  
つじよく

辱を感じたのであろう、嘘か誠か、幕の上にかいてある芸者

の一人々々の経歴、容貌、性質を限りもなく説明しはじめた。

拍子木がチヨンくと二ツ鳴つた。幕開の唄と三味線が

聞え引かれた幕が次第に細かく早める拍子木の律につれて片寄

せられて行く。大向から早くも役者の名をよぶ掛け声。たい

くつした見物人の話声が一時に止んで、場内は夜の明けたや

うな一種の明るさと一種の活気を添へた。

お豊とよは今戸橋いまどぼしまで歩いて来て時節じせつは今正いままに爛漫らんまんたる春の四月である事を始めて知つた。手一ツてひとの女世帯をんなじよたいに追はれてゐる身は空が青く晴れて日が窓に射込みさしこ、斜向すぢむかうの「宮戸川」と云ふ鰻屋うなぎやの門口かどぐちの柳が緑色の芽をふくのによつと時候じこうの變遷へんせを知るばかり。いつも両側の汚れた瓦屋根かはらやねに四方あたりの眺望てうぼうを遮さへぎられた地面の低い場末ばすゑの横町よこちやうから、今突いまとつぜん然、橋の上に出て見た見た四月の隅田川すみだがはは、一年に二三度と数へるほどしか外出そとでする事のない母親お豊とよの老眼らうがんをば信じられぬほどに驚おどろかしたのである。晴れ渡つた空の下に、流れる水の輝き、堤つゝみの青草あをくさ、その上につゞく桜さくらの花、種々さまざまの旗ひらめが閃く大学の艇庫ていこ、その辺へんか

ら起る人々の叫び声、鉄砲の響。渡船から上下りする花見

の人の混雑。あたり一面の光景は疲れた母親の眼には余りに色彩

が強烈すぎる程であつた。お豊は渡場の方へ下りかけたけ

れど、急に恐るゝ如く踵を返して、金龍山下の日蔭になつた

瓦町を急いだ。そして通りがりの成るべく汚い車、成るべ

く意気地のなさゝうな車夫を見付けて恐るゝ、

「車屋さん、小梅まで安くやつて下さいな。」と云つた。

お豊は花見どころの騒ぎではない。もう何していゝのか分らな

い。望みをかけた一人息子の長吉は試験に落第してしまつた

ばかりか、もう学校へは行きたくない、学問はいやだと云ひ出し

た。お豊は途法に暮れた結果、兄の蘿月に相談して見るより外に

仕様がな<sup>しやう</sup>いと思つたのである。

三度目に掛合<sup>かけあ</sup>つた老車夫<sup>らうしやふ</sup>が、やつとの事でお豊<sup>とよ</sup>の望む賃銀<sup>ちんぎん</sup>

で小梅<sup>こうめゆ</sup>行きを承知<sup>あづまばし</sup>した。吾妻橋<sup>あづまばし</sup>は午後<sup>あづまばし</sup>の日光<sup>あづまばし</sup>と塵埃<sup>ちんあい</sup>の中<sup>あづまばし</sup>にお

びたゞしい人出<sup>ひとで</sup>である。着飾<sup>きかざ</sup>つた若い花見<sup>あうくわ</sup>の男女<sup>にぎは</sup>を載<sup>よそ</sup>せて勢よく

走る車<sup>あひだ</sup>の間<sup>あひだ</sup>をば、お豊<sup>とよ</sup>を載<sup>の</sup>せた老車夫<sup>らうしやふ</sup>は梶<sup>かぢ</sup>を振<sup>ふ</sup>りながらよた／＼

歩いて橋<sup>いな</sup>を渡<sup>あうくわ</sup>るや否<sup>にぎは</sup>や桜花<sup>あうくわ</sup>の賑<sup>よそ</sup>ひを外<sup>す</sup>に、直<sup>な</sup>ぐと中<sup>なか</sup>の郷<sup>がう</sup>へ曲<sup>まが</sup>つ

て業平橋<sup>なりひらばし</sup>へ出ると、この辺<sup>へん</sup>はもう春<sup>はる</sup>と云<sup>い</sup>つても汚<sup>きたな</sup>い鱗<sup>こけらぶき</sup> 茸<sup>きのこ</sup>の

屋根<sup>やね</sup>の上に唯<sup>た</sup>だ明<sup>あかる</sup>く日<sup>ひ</sup>があたつてゐると云<sup>い</sup>ふばかりで、沈<sup>ちん</sup>滞<sup>たい</sup>し

た堀割<sup>ほりわり</sup>の水<sup>みづ</sup>が麗<sup>うら</sup>かな青空<sup>あおぞら</sup>の色<sup>いろ</sup>を其<sup>そ</sup>のまゝに映<sup>うつ</sup>してゐる曳舟<sup>ひきふね</sup>通<sup>どほ</sup>り。

昔<sup>むかし</sup>は金瓶<sup>きんべい</sup>楼<sup>ろう</sup>の小太夫<sup>こたいふ</sup>と云<sup>い</sup>はれた蘿月<sup>らげつ</sup>の恋女房<sup>こひめ</sup>は、綿衣<sup>ぬのこ</sup>の襟<sup>えり</sup>元<sup>もと</sup>

に手拭<sup>てぬぐひ</sup>をかけ白粉<sup>おしろい</sup>焼<sup>や</sup>けのした皺<sup>しわ</sup>の多い顔<sup>かほ</sup>に一<sup>ひ</sup>ぱいの日<sup>ひ</sup>を受け

て、子供の群がめんこや独楽の遊びをしてゐる外には至つて人  
 通りの少い道端の格子戸先で、張板に張物をして居た。

駈けて来て止る車と、其れから下りるお豊の姿を見て、

「まあお珍しいぢやありませんか。ちよいと今戸の御師匠さん  
 ですよ。」と開けたまゝの格子戸から家の内へと知らせる。内には  
 主人の宗匠が万年青の鉢を並べた縁先へ小机を据ゑ頻  
 に天地人の順序をつける俳諧の選に急がしい処であつた。

掛けてゐる眼鏡をはづして、蘿月は机を離れて座敷の真中に  
 坐り直つたが、襷をとりながら這入つて来る妻のお滝と来訪の  
 お豊、同じ年頃の老いた女同士は幾度となくお辞儀の譲合  
 をしては長々しく挨拶した。そしてその挨拶の中に、「長ち

やんも御丈夫ごぢやうぶですか。「はア、然しかし彼あれにも困りきりませす。」  
 と云いふやうな問答もんだふから、用件は案外に早く蘿月らげつの前に提出され  
 る事になつたのである。蘿月らげつは静しづかに煙草たばこの吸すひ殻がらをはたいて、誰たれ  
 にかぎらず若い中うちは兎角とかくに氣の迷ふことがある。氣の迷つてゐる  
 時には、自分にも覺おぼえがあるが、親の意見も仇あだとしか聞きえない。  
 他はたから余あまり厳きびしく干渉かんせふするよりは却かへつて氣まかせにして置はく方ほう  
 が薬くすりになりはしまいかと論じた。然しかし目に見えない將來の恐怖きようふ  
 ばかりに満みたされた女をんなの親おやの狭せまい胸むねには斯かる通人つうじんの放任主義ほうにん  
 は到たう底てい容いれられべきものでない。お豊とよは長ちやう吉きちが久くしい以前  
 から屢しばしば學校を休やすむ為ために自分の認みとめ印いんを盗ぬすんで届とどけしよ書しよを偽ぎ造ぞう  
 してゐた事をば、暗黒な運命の前兆ぜんてうである如ごとく、声こゑまで潜ひそめて

長々しく物語る………

「学校がいやなら如何するつもりだと聞いたたら、まアどうでせう、役者になるんだツて云ふんですよ。役者に。まア、どうでせう。

兄さん。私やそんなに長吉の根性が腐つちまつたのかと思つたら、もう実に口惜しくツてならないんですよ。」

「へーえ、役者になりたい。」訝る間もなく蘿月は七ツ八ツの頃によく三味線を弄物にした長吉の生立ちを回想した。「当人がたつてと望むなら仕方のない話だが………困つたものだ。」

お豊は自分の身こそ一家の不幸の為に遊芸の師匠に零落したけれど、わが子までもそんな賤しいものにしては先祖の位牌



に対して 申まを 訳し がないと述べる。蘿月らげつは一家の破産滅亡めつばうむかしの昔  
 を云出いひだされると勘当かんたうまでされた放蕩はうたうざんまい三昧さんまいの身は、何なんにつけ、  
 禿はげ頭あたまをかきたいやうな当惑たうわくを感じる。もとく芸人社会は  
 大好きだいすきな趣味しゆみせい性から、お豊とよの偏屈へんくつな思想をば攻撃こうげきしたいと心  
 では思ふものゝそんな事から又またしても長ながたらしく「先祖せんぞの位牌ゐはい」  
 を論じ出されては堪たまらないと危あやぶむので、宗匠そうしやうは先まづ其その場を  
 円滑ゑんくわつに、お豊とよを安心あんしんさせるやうにと話をまとめかけた。  
 「兎とに角かく一応いちおうは私わしが意見いけんしますよ、若い中うちは迷まよふだけに却かへつて始し  
 末まつのいゝものさ。今夜こんやにでも明日あしたにでも 長ちやうきち 吉きちに遊あそびに来るや  
 うに云いつて置きなさい。私わしが屹度きつと改心かいしんして見せるから、まア  
 そんなに心配しんぱいしないがいゝよ。なに世の中は案あじるより産うむが安

いぎ。」

お豊は何分よろしくと頼んでお滝が引止めるのを辞退して其の家を出た。春の夕陽は赤々と吾妻橋の向うに傾いて、花見帰りの混雑を一層引立て、見せる。其の中にお豊は殊更元氣よく歩いて行く金ボタンの学生を見ると、それが果して大学校の生徒であるか否かは分らぬながら、我児もあのやうな立派な学生に仕立てたいばかりに、幾年間女の身一人で生活と戦つて来たが、今は生命に等しい希望の光も全く消えてしまつたのかと思ふと実に堪へられぬ悲愁に襲はれる。兄の蘿月に依頼しては見たものゝ矢張安心が出来ない。なにも昔の道楽者だからと云ふ訳ではない。長吉に志を立てさせるのは到底人間業では及ぬ事、

神かみほとけ 仏ほとけ の力ちからに頼たのらねばならぬと思おもひ出した。お豊とよは乗のりつて来た  
 車くるまから急いそぎに雷かみなり門もんで下くだりた。仲なか店みせの雜ざつたふ沓ふをも今いまでは少すこしも  
 恐おそれずに觀くわん音おん堂だうへと急いそいで、祈きぐわん願がんを凝こらした後のちに、お神みくじ籤じを  
 引ひいて見た。古こびた紙かみ片きれに木もく版はん摺ずりで、  
 お豊とよは大だい吉きちと云いふ文字もじを見て安やす心しんはしたものゝ、大だい吉きちは却かへつ  
 て凶きように返かへり易やすい事ことを思おもひ出して、又またもや自分じぶんからさま／＼な恐き  
 怖おそれをつくりだして、非常ひじょうに疲つかれて家うちへ歸かへつた。

## 九

午ひる後ごから龜かめ井ゐ戸どの龍りゆう眼がん寺じの書しよ院ゐんで俳はい諧かいの運うん座ざがあると

いふので、蘿月らげつはその日の午前たつに訪ねて来た。長吉ちやうきちと茶漬ちやづけを  
 すました後のち、小梅こうめの住居すまひから押上おしあげの堀割ほりわりを柳島やなぎしまの方ほうへと  
 連れだつて話しながら歩いた。堀割ほりわりは丁度ちやうど真昼まひるの引汐ひきしほで真ま  
 つくろつくる黒きたな汚でいどない泥土そこの底そこを見せてゐる上に、四月あたくかの暖あたくかい日光てりつに照付てりつ  
 けられて、溝泥どぶどろの臭気しうきを盛さかんんに発散あして居る。何処どこからともなく  
 煤烟ばいえんの煤すすが飛すんで来て、何処どこといふ事ことなしに製造場せいざうばの機械きかくの音ね  
 が聞きこえる。道端みちばたの人家じんかは道みちよりも一段低ひくい地面ぢめんに建たてられてあ  
 るので、春はるの日の光ひかりを外よそに女房共にようばらどもがせつせと内職ないしよくして居ある薄う  
 暗くらい家内かないのさまが、通とほりながらにすつかりと見透みとほされる。さう  
 云いふ小家こいへの曲まがり角かどの汚よごれた板目はめには売薬ばいやくと易占うらなひの広告まじに交まじ  
 て至いたる処ところ女工募集よこうぼしふの貼紙はりがみが目めについた。然しかし間まもなくこの陰い

吉大二十六第

災さいかん  
 輒じじにしりぞく  
 時じじにしりぞく  
 々  
 退しりぞく

わざはひもおひく／＼にしりぞ  
 き運ひらくとのことなり

名な  
 顕あらはれて  
 四しほうにあがる  
 方  
 揚あがる

名のほまれおひく／＼天下にか  
 くれなしとの事なり

改ふるきをあらためてかきわてろくにじようす  
 故し  
 重  
 乗し  
 禄

ふるき事は改りてふたゝび禄  
 をうるなり

昇たかき  
 高にのぼつて  
 福ふくおのづからさかえん  
 自  
 昌

りつしん出世してふつきはん  
 じやうするていなり

ぐわんもう叶べし○病人本ぶくす○うせもの出る○まち人  
 きたる○屋づくりわたましさはりなし○たびだちよし○よ  
 めとりむことりげんぶく人をかゝへる萬よし

んうつ 鬱な往來は迂曲りながらに少しく爪先上りになつて行くか  
 と思ふと、片側に赤く塗つた妙見寺の堀と、それに対して心  
 持ちよく洗ひざらした料理屋橋本の板堀のために突然面  
 目を一変させた。貧しい本所の一区が此処に尽きて板橋  
 のかゝつた川向うには野草に蔽はれた土手を越して、亀井戸村の  
 畠と木立とが美しい田園の春景色をひろげて見せた。蘿月は踏  
 み止つて、  
 「私の行くお寺はすぐ向うの川端さ、松の木のそばに屋根が見  
 えるだらう。」  
 「ぢや、伯父さん。こゝで失礼ませう。」 長吉は早くも帽  
 子を取る。

「いそぐんぢや無い。咽喉のどが乾かわいたから、まア長ちやうきち吉ちよつと、鳥渡

休ゆんで行ゆかうよ。」

赤ぬく塗ぬつた板いた塀べいに沿ようて、妙見寺めうけんじの門前かどまへに葭簀よしずを張はつた休や

すみぢや、茶屋ちやへと、蘿月らげつは先さきに腰こしを下おろした。一直線ひきしほの堀割ほりわりはこゝも同

じやうに引ひ汐しほの汚きたない水底みなそこを見みせてゐたが、遠はたけくの畠はうの方から

吹ふいて来きる風かぜはいかにも爽さわやかで、天神様てんじんさまの鳥居とりゐが見みえる向むかうの

堤つゝみの上うへには柳やなぎの若芽わかめが美ひらめしく閃ひらめいてゐるし、すぐ後うしろの寺てらの門かどの屋や

根ねには雀すずめと燕つばめが絶まえ間まなく轉さへづつてゐるので、其処そこ此処ここに製せい造ざう場ばの

烟けむだ出でしが幾いくほん本ほんも立たつてゐるに係かゝらず、市街まちからは遠ちやうきちい春はるの午ひるす

後ぎの長閑のどけさは充こゝろもち分に心こゝろもち持あぢはよく味あぢははれた。蘿月らげつは暫しばらくあたり

を眺ながめた後のち、其それとなく長ちやうきち吉ちよつとの顔かほをのぞくやうにして、

を眺ながめた後のち、其それとなく長ちやうきち吉ちよつとの顔かほをのぞくやうにして、

「さつきの話は承知してくれたらうな。」

長吉は丁度茶を飲みかけた処なので、領付いたまゝ、口

に出して返事はしなかつた。

「兎に角もう一年辛抱しなさい。今の学校さへ卒業しちまへば

………母親だつて段々取る年だ、さう頑固ばかりも云やアし

まいから。」

長吉は唯だ首を領付かせて、何処と当もなしに遠くを眺め

てゐた。引汐の堀割に繋いだ土船からは人足が二三人し

て堤の向うの製造場へと頻に土を運んでゐる。人通りと云つては

一人もない此方の岸をば、意外にも突然二台の人力車が天神

橋の方から駈けて来て、二人の休んでゐる寺の門前で止つた。



おほかたはかまる  
大方墓参りに来たのであらう。町家の内儀らしい丸鬘の  
女が七八ツになる娘の手を引いて門の内へ這入つて行つた。  
長吉は蘿月の伯父と橋の上で別れた。別れる時に蘿月は再  
び心配さうに、

「ぢや……」。と云つて暫く黙つた後、「いやだらうけれど当

分辛抱しなさい。親孝行して置けば悪い報はないよ。」

長吉は帽子を取つて軽く礼をしたが其のまゝ、駈けるやう  
に早速に元来た押上の方へ歩いて行つた。同時に蘿月の姿は  
雑草の若芽に蔽はれた川向うの土手の陰にかくれた。蘿月は六十  
に近いこの年まで今日ほど困つた事、辛い感情に迫められた事は  
ないと思つたのである。妹お豊のたのみも無理ではない。同時に

長吉が芝居道へ這入らうといふ希望もまたわるいとは思は  
 れない。一寸の虫にも五分の魂で、人にはそれ／＼の氣質があ  
 る。よかれあしかれ、物事を無理に強ひるのはよくないと思つて  
 るるので、蘿月は両方から板ばさみになるばかりで、何れにとも  
 賛同する事ができないのだ。殊に自分が過去の経歴を回想す  
 れば、蘿月は長吉の心の中は問はずとも底の底まで明かに推  
 察される。若い頃の自分には親代々の薄暗い質屋の店先  
 に坐つて麗かな春の日を外に働きくらすのが、いかに辛ういかに  
 情なかつたであらう。陰気な燈火の下で大福帳へ出入の金  
 高を書き入れるよりも、川添ひの明い二階家で洒落本を読む  
 方がいかに面白かつたであらう。長吉は髻を生した堅苦

しい勤め人などになるよりも、自分の好きな遊芸で世を渡りた  
いと云ふ。それも一生、これも一生である。然し蘿月は今よんど  
ころ無く意見役の地位に立つ限り、そこまでに自己の感想を暴露  
してしまふわけには行かないので、其の母親に対したと同じやう  
な、其の場かぎりの気安めを云つて置くより仕様がなかつた。

長吉は何処も同じやうな貧しい本所の街から街をばてく  
く歩いた。近道を取つて一直線に今戸の家へ帰らうと思ふの  
でもない。何処へかり道して遊んで帰らうと考へるのでもない。  
長吉は全く絶望してしまつた。長吉は役者になりたい自  
分の主意を通すには、同情の深い小梅の伯父さんに頼るより外に

道がない。伯父をぢさんはきつと自分を助けてくれるに違ひないと予期してゐたが、その希望は全く自分を欺あざむいた。伯父をぢは母親のやうに正面から烈はげしく反対を称となへはしなかつたけれど、聞いて極樂ごくらく見て地獄ぢごくの譬たとへを引き、劇道げきだうの成功の困難、舞台の生活の苦痛、芸人社会の交際の煩瑣はんさな事なぞを長々ながくと語つた後のち、母親の心をも推察すゐさつしてやるやうにと、伯父をぢの忠告を待たずともよく解わかつてゐる事を述べつゞけたのであつた。長吉ちやうきちは人間といふものは年を取ると、若い時分じぶんに経験した若いものしか知らない煩悶はんもん不安をばけろりと忘れてしまつて、次の時代に生れて来る若いもの、身うへの上を極きはめて無頓着むとんちやくに訓戒くんかい批評する事のできる便利な性質を持つてゐるものだ、年を取つたものと若いもの、間あひだには到底たうてい

一致されない懸隔のある事をつくづく感じた。

何処まで歩いて行つても道は狭くて土が黒く湿つてゐて、大

方は路地のやうに行き止りかと危まれるほど曲つてゐる。苔の

生えた鱗茸きの屋根、腐つた土台、傾いた柱、汚れた板目、干し

である檻樓や襦袢や、並べてある駄菓子や荒物など、陰鬱な

小家は不規則に限りもなく引きつゞいて、其の間に時々驚くほど

大きな門構の見えるのは、ことごとく製造場であつた。瓦屋根の高

く聳えて居るのは古寺であつた。古寺は大概荒れ果て、

破れた塀から裏手の乱塔場がすつかり見える。束になつて倒れ

た卒塔婆と共に青苔の斑点に蔽はれた墓石は、岸と云ふ限界

さへ崩れてしまつた水溜りのやうな古池の中へ、幾個となく

のめり込んで居る。無論新しい手向の花などは一つも見えない。  
 古池には早くも昼中に蛙の音が聞えて、去年のまゝなる枯  
 草は水にひたされて腐つて居る。

長吉はふと近所の家の表札に中郷竹町と書いた町

の名を読んだ。そして直様、此の頃に愛読した為、永春水の

「梅曆」を思出した。あゝ、薄命なああの恋人達はこんな

気味のわるい湿地の街に住んでゐたのか。見れば物語の挿絵に似

た竹垣の家もある。垣根の竹は枯れきつて其の根元は虫に喰は

れて押せば倒れさうに思はれる。潜門の板屋根には瘦せた柳

が辛くも若芽の緑をつけた枝を垂してゐる。冬の昼過ぎ窃かに米

八が病気の丹次郎をおとづれたのもかゝる佗住居の戸口で

あつたらう。半次郎はんじらうが雨あめの夜よの怪談くわいだんに始めてお糸いとの手を取つたのも矢張やはりか斯かる家いえの一間ひとまであつたらう。長吉ちやうきちは何なんとも云いへぬ恍くわうこつ惚ひと悲哀ひあいとを感じた。あの甘あまくして柔やはらかく、忽たちまちにして冷れいたん淡たんな無頓着むとんちやくな運命もてあその手に弄もてあそばれたい、と云いふ止やみ難がたい空想くわうに駆かられた。空想くわうの翼つばさのひろがるだけ、春はるの青空あめうりが以前てうせんぶえよりも青く広く目めに映えいじる。遠とほくの方はうから飴あめ売うりの朝てう鮮せん笛ふえが響ひびき出した。笛ふえの音ねは思おもひがけない処ところで、妙めうな節ふしをつけて音調おんてうを低ひかめるのが、言葉ことばに云いへない幽いうしう愁もよほを催もよほさせる。

長吉ちやうきちは今いままで胸むねに蟠わだかまつた伯父おぢに対する不し満まを暫しばらく忘わすれた。

現実げんじつの苦悶くもんを暫しばらく忘わすれた………。

## 十

氣候が夏の末から秋に移つて行く時と同じやう、春の末から夏  
 の始めにかけては、折々大雨が降つゞく。千束町から吉  
 原田圃は珍しくもなく例年の通りに水が出た。本所も同じや  
 うに所々に出水したさうで、蘿月はお豊の住む今戸の近  
 辺はどうであつたかと、二三日過ぎてから、所用の帰りの夕  
 方に見舞に来て見ると、出水の方は無事であつた代りに、それ  
 よりも、もつと意外な災難にびつくりしてしまつた。甥の長  
 吉が釣台で、今しも本所の避病院に送られやうと云ふ騒  
 の最中である。母親のお豊は長吉が初袷の薄着をし



たまゝ、千束町近辺せんぞくまちきんべんの出水でみづの混雑を見にと夕方ゆふがたから夜おそくまで、泥水どろみづの中を歩きつたまはために、其その夜よから風邪かぜをひいて忽ち腸窒扶斯たちまちやうちプスになつたのだと云ふい医者いしやの説明をそのまゝ語つて、泣きながら釣台つりだいの後あとについて行つた。途法とほふにくれた蘿月らげつはお豊とよの歸つて来るまで、否いやおう応るすばんなく留守番うちにと家の中に取り残されてしまつた。

家うちの中は区役所の出張員しゅつちやういんが硫黄いわうの煙と石炭酸せきたんさんで消毒した後あと、まるで煤掃すすはきか引越ひっこしの時のやうな狼藉らうぜきに、丁度ちやうど人氣ひとけのない寂さびしさを加へて、葬式さうしきの棺桶くわんおけを送出おくりだした後あとと同じやうな心持こゝろもちである。世間はゞかを憚はげるやうにまだ日の暮れぬ先さきから雨戸あまどを閉しめた戸外おもてには、夜と共に突とつぜん然ぜん強い風が吹き出したと見

えて、家いへちゆう中の雨戸あまどががた／＼鳴り出した。気候はいやに肌寒はだ
  
 くなつて、折々をり／＼勝手口かつてぐちの破障子やぶれしやうじから座敷ざしきの中まで吹き込
   
 んで来る風が、薄暗うすぐらい釣ランプつるしの火をば吹き消しさうに揺ゆると、
   
 其その度々たび／＼、黒い油煙ゆえんがホヤを曇くもらして、乱雑らんざつに置き直された家
   
 具ぐの影よこが、汚よごれた畳たゝみと腰張こしばりのはがれた壁の上に動く。何処どこか近
   
 くの家で百ひやく萬遍まんべんの念仏ねんぶつを称となへ始める声こゑが、ふと物哀ものあはれに
   
 耳みみについた。蘿月らげつは唯ただ一人ひとりで所しよざい在ざいがない。退屈たいくつでもある。
   
 薄淋うすさびしい心こゝろ持もちもする。かう云いふ時には酒さけがなくてはならぬ
   
 と思おもつて、台だい所どころを探まはしつたが、女世帯をんなじよたいの事こととて酒盃さかづき
  
 一ツ見み当あたらない。表おもての窓際まどぎはまで立戻たちもどつて雨戸あまどの一枚まいを少すこしば
   
 かり引き開あけて往來わうらいを眺ながめたけれど、向側むかうがはの軒燈けんとうには酒

屋らしい記号しるしのものは一ツも見えず、場末ばすゑの街は宵まちながらにもう  
 おほかた大方は戸を閉めてゐて、陰気いんきな百萬遍ひやくまんべんの声こゑが却かへつてはつき  
 り聞えるばかり。河かはの方ほうから烈はげしく吹きつける風が屋根やねの上の電  
 線をヒュー／＼鳴すのと、星の光の冴さえて見えるのとで、風のあ  
 る夜は突とつぜん然冬が来たやうな寒い心持こころもちをさせた。  
 蘿月らげつは仕方なしに雨戸あまどを閉めて、再びぼんやり釣ランプつるしの下したに  
 坐すわつて、続けざまに煙草たばこを喫のんでは柱時計はしらどけいの針の動くのを眺ながめ  
 た。時々鼠ねずみが恐おそろしい響ひびきをたて、天井裏てんじやうららを走る。ふと蘿月らげつは何  
 かその辺へんに読む本でもないかと思ひついて、箆筒たんすの上や押入おしいれの  
 中を彼方あつち此方こつちと覗のぞいて見たが、書物と云いつては常磐津ときはづの稽古本けいこぼん  
 に綴とどろ暦よみの古いもの位くらゐしか見当みあたらないので、とう／＼釣ランプつるし

を片手かたてにさげて、長吉ちやうきちの部屋へやになつた二階あがまで上つて行つた。  
 机つくゑの上に書物は幾冊いくさつも重ねてある。杉板すぎいたの本箱も置かれて  
 ある。蘿月らげつは紙入かみいれの中にはさんだ老眼鏡らうがんきやうを懐中ふところから取り  
 出して、先づ洋装まの教科書をば物珍ものめづらしく一冊々々ひろげて見  
 てゐたが、する中うちにぱたりと畳たゝみの上に落ちたものがあるので、何なに  
 かと取上げとりあて見ると春着はるぎの芸者姿すがたをしたお糸いとの写真いとであつた。そ  
 つと旧もとのやうに書物の間あひだに収めて、猶なほもその辺へんの一冊々々を何なに  
 心こゝろもなく漁あさつて行くと、今度は思ひがけない一通いっとうの手紙てがみに行ゆき  
 当たつた。手紙は書き終をはらずに止やめたものらしく、引き裂さいた巻まき  
 紙がみと共に文句もんくは杜切とぎれてゐたけれど、読み得うるだけの文字もじで十  
 分に全体の意味を解する事ができる。長吉ちやうきちは一度ひとたび別れたお

糸とは互いに異なる其その境きやう遇ぐうから日ひ一日いちにちと其その心こころまでが遠とほざかつて行つて、折角せつかくの幼馴染をさなくじみつひも遂つひにはあかの他人ひとに等ひとしいものになるであらう。よし時々ときどきに手紙の取りやりはして見ても感情の一致して行ゆかない是非ぜひなさを、こま／＼と恨うらんでゐる。それにつけて、役者か芸人になりたおもひいと思おもひ定さだめたが、その望つひみも遂つひに遂つひげられず、空むなしく床屋とこやの吉きちさんの幸福うらやを羨うらやみながら、毎日まいにちぼんやりと目的のない時間を送つてゐるつまらなさ、今は自殺する勇氣もないから病氣にでもなつて死ねばよいと書いてある。

蘿月らげつは何なんと云いふわけもなく、長ちやう吉きちが出水でみづの中なかを歩いて病氣になつたのは故意こいにした事ことであつて、全ぜん快くわいする望のぞみはもう絶ぜえ果はてゝあるやうな実じつに果敢はかない感かんじに打うたれた。自分は何故なぜあの時

あのやうな心にもない意見をして長吉の望みを妨げたのかと

後悔の念に迫められた。蘿月はもう一度思ふともなく、女に

迷つて親の家を追出された若い時分の事を回想した。そして

自分はどうしても長吉の味方にならねばならぬ。長吉を

役者にしてお糸と添はしてやらねば、親代々の家を潰してこれま

でに浮世の苦勞をしたかひがない。通人を以て自任する松風

庵蘿月宗匠の名に愧ると思つた。

鼠がまた突如に天井裏を走る。風はまだ吹き止まない。釣う

ノプの火は絶えず動揺く。蘿月は色の白い眼のぱつちりした面

長の長吉と、円顔の口元に愛嬌のある眼尻の上つ

たお糸との、若い美しい二人の姿をば、人情本の作者が口絵

の意匠いしやうでも考へるやうに、幾度いくたびか並ならべて心の中うちに描きだした。  
そして、どんな熱病とりにつに取付かれてもきつと死んでくれるな。長ちやう  
吉きち、安心しろ。乃公おれがついてゐるんだぞと心に叫さけんだ。

(明治22年12月「新小説」)





# 青空文庫情報

底本：「明治の文学 第25巻 永井荷風・谷崎潤一郎」筑摩書房

2001（平成13）年11月20日初版第1刷発行

底本の親本：「荷風全集 第5巻」岩波書店

1963（昭和38）年1月

初出：「新小説 第14年第12巻」

1909（明治42）年12月

入力：阿部哲也

校正：米田

2014年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# すみだ川

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>